

嬉遊笑覽

口寄之部
浴湯

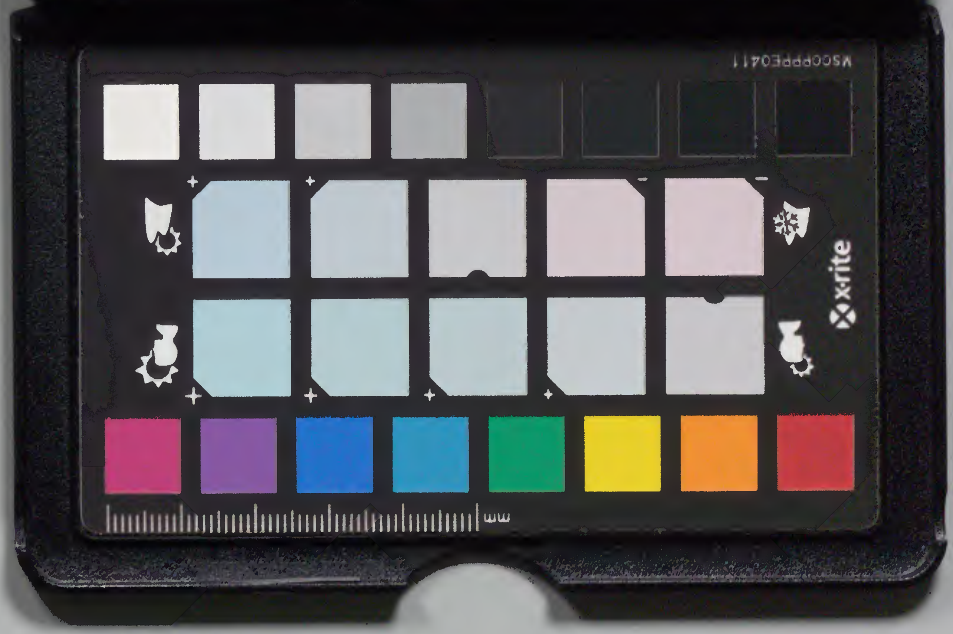
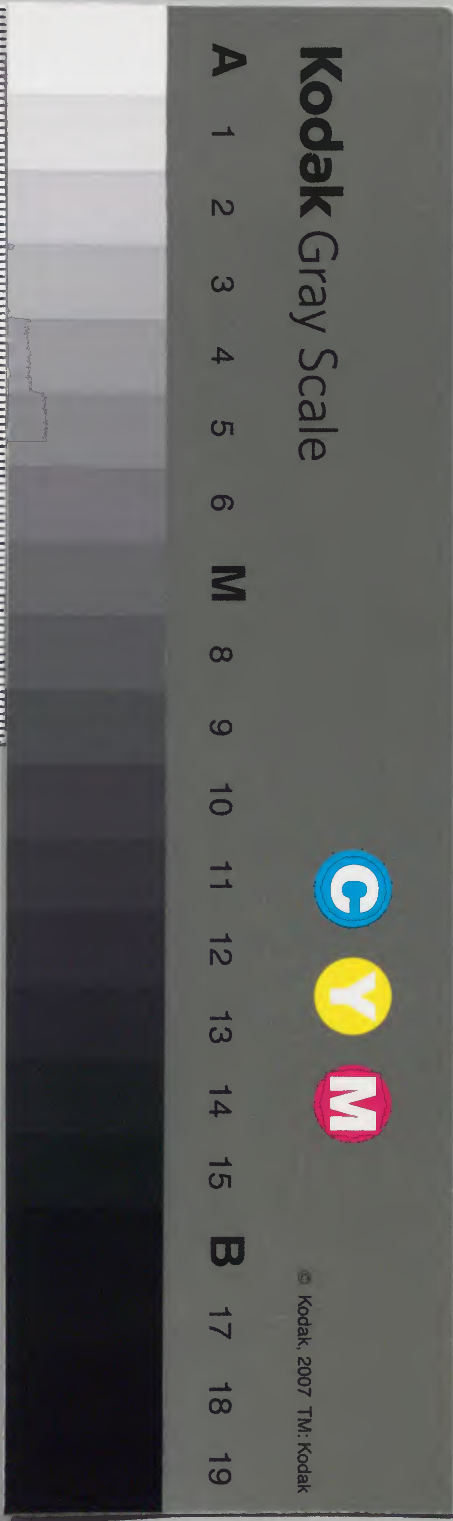
廿六之七

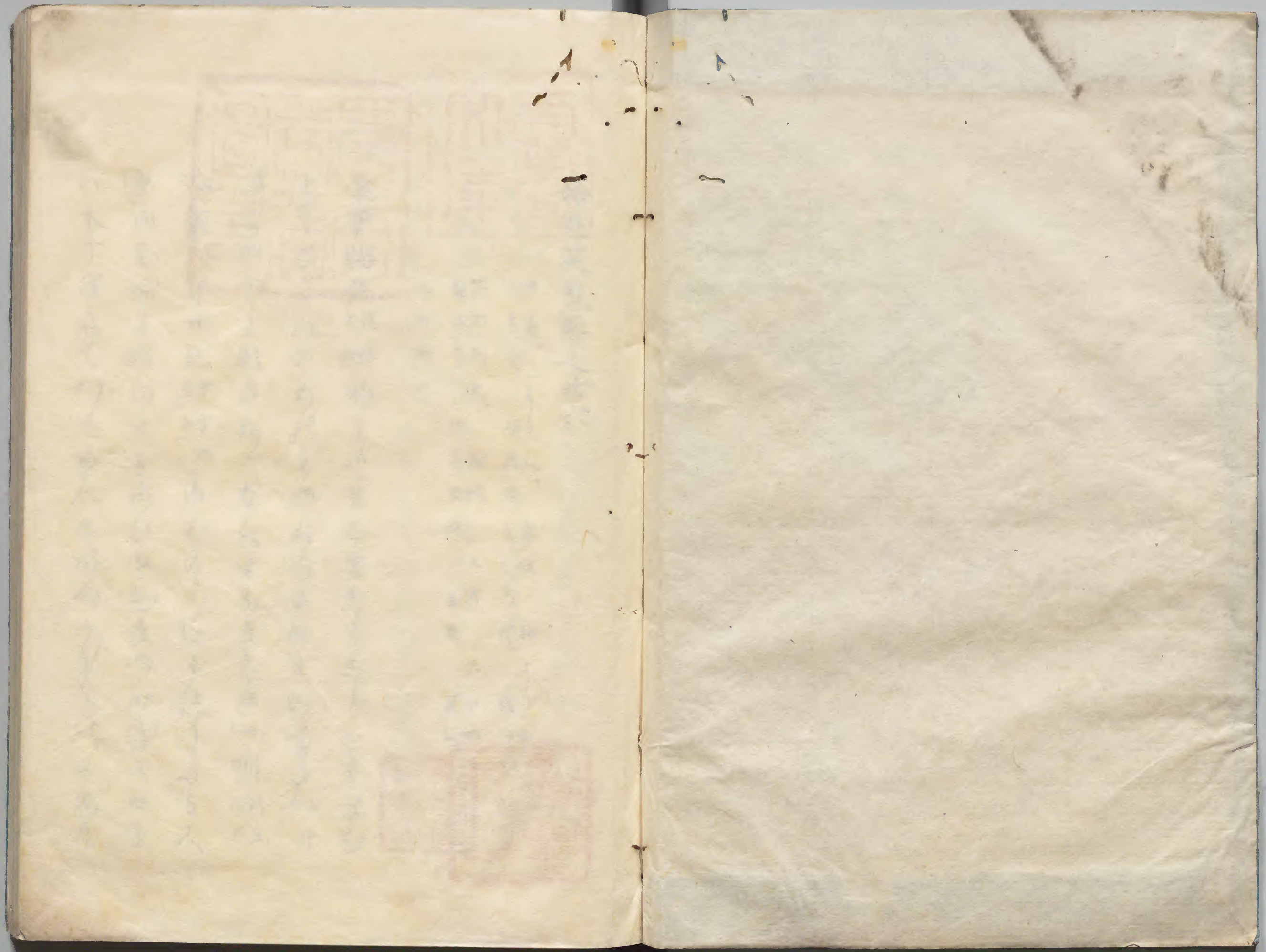
和
第三號
共十八

大政官文庫		
和	七	二
書	四	〇
門	六	九
	五	八
	架	冊

內閣文庫		
和	七	一
書	四	八
類	六	架
	五	冊

內閣文庫		
番號	和	7465
冊數	18 (13)	
函號	184	1

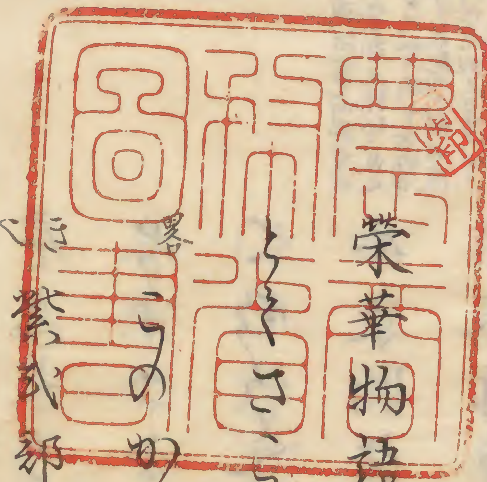
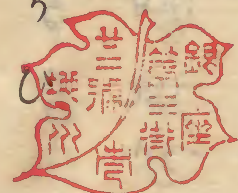






喜遊 笑覧卷之廿六

口寄こより外人頭寄弦ろ佛神より板り
茶吉尼天狐の飯綱五通金蚕古小母
髪きり
犬神蛇神



榮華物語

大後

梅

ゆゑのまこやそくちをもちむ

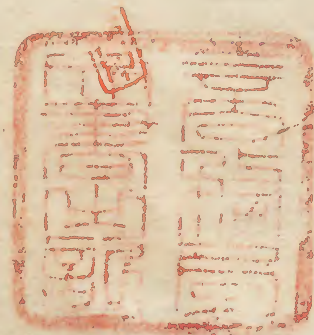
人のめれとゆらちよせよいとる中

のりねさたくなはふあきく三州のりさ

日記中宮山諸毛のけうはりしる人

々水之やう好ひとよけいをきつりてく口よ

ハ木丁伐さへつゝあんさ何りりてあり



明倫彙編
 家範典
 卷之四
 婦人部
 節婦傳
 明倫彙編家範典卷之四婦人部節婦傳
 倫堂歌郡志詠傳直之
 計費不貲時有金姓者
 金者不貲配西水驛自陳
 能神不假人力費止三
 金如教給之金以銀市低
 筆殊砂錫銀米肉乾點
 殊砂首道設祭祀焚錫
 鐵鳴鑼教次其堂立屋濠
 股落倫亦用前法倫直之
 倫居濠股里于北福
 教家即以是術與人傳
 序為老死無嗣術不傳

あり壺井氏に標注し水物怪の事或ハ水産の
 時或ハ水重病の付寄物怪問之義也立物如只女
 房立之号物付是也と云物といふを降臺乃と云
 せりさよハあづ物怪といふと注をまゝに
 て明くくのより人よ物怪つぎぬまハ是物怪く
 平家物語文ゆる刺こハ水物の事と云何まゝと
 入ある祢子明五此むくにうけまぬあハ
 まゝと云清少納言よまのけよいさうあむ
 人よやう法をべさ人ともありさやうなる
 六の云う法をつさ人の祢子なり崇或初日記ハ

して見ざるべきよき崇物候よりくる水くらよせ
 ハ今もけを寄るまぶよ水をま向る考あり是れ
 リ新猿樂記よ四御許者現女也卜占神遊寄絃口
 寄之上手也舞袖飄々如仙人遊歌声和雅如頻鳥
 鳴非調子琴音而天神地祇垂影向無拍子鼓声而
 □□野子手必傾耳ありあよ神遊ハ歌舞れるづく
 寄絃ハ今もいちこのまゝまゝ口寄るの寄人
 をまゝそれガ口もままままま成吹れるづく
 これ今まゝまゝ死あこり小影今ハ寄絃を口
 よせまゝハ混り非調子の琴音はこら又

り人ハ今そよりくる長濱のあし 幸の駒よ手鑑
ゆりうけは古き口寄る日さの朝や夕く鴨
鷺合戦物語くら成語くあづさふくかのう
んち記梅も光の小袖ういどりさきふあをり
弓うちくしゆく天志やりぐ地志やりぐ只今
よせさうたろ所の凶者のよみぢれうけり浦さ
くきうせはくより人ハ今そよりくる長ちゆや
あしけのら浦よたつあゆりうけあうこのを
ぶ今の志申りようやああうぐこの法用やあ
その中ハさてもかきもあうぬぢり有謡曲

拾葉集^お云寄人ハ寄神共降童やりのゆか或ハ生灵
死灵成祈る時彼美乃りりに童子をそあへむ
く祈法者降参さる事或ハ美を人形と化し日
らに馬なとあうりの人形をのせき祈り
終りて後川よ流るも有この祈もらまのの
成よめるせえく今によせする者ハ縣巫女
めく神家成もあきくるものくとそあき成りち
らといふりちこれ賤さ名ハあし神前よ祈
楽をそる成りちと祈をいつこの義よやこれど
和名抄あとも現を乞盗類よ收めて新ハり

より賤きものときゝる東鏡卷二十六 イナコ 一古娘依

召参上とあり又義山後覺は太閤伏見御切の宮

にゝ市八當社の神主あるりこん儀と中 下文は

房と紀女約は糶祓子あとの名より潜上のとあ

らん元隣り誰身れゝ 四巻 水子屋 ん の小毛

の成呼より 云々 云々 云々 云々 云々 云々 云々 云々

計あるは 云々 云々 云々 云々 云々 云々 云々 云々

うち 云々 の 云々 云々 云々 云々 云々 云々 云々 云々

のありん 云々 云々 云々 云々 云々 云々 云々 云々

下 云々 云々 云々 云々 云々 云々 云々 云々

死 云々 云々 云々 云々 云々 云々 云々 云々

バ 云々 云々 云々 云々 云々 云々 云々 云々

宛 云々 云々 云々 云々 云々 云々 云々 云々

小 云々 云々 云々 云々 云々 云々 云々 云々

大 云々 云々 云々 云々 云々 云々 云々 云々

我家の法術 云々 云々 云々 云々 云々 云々 云々 云々

ら 云々 云々 云々 云々 云々 云々 云々 云々 云々 云々

ま 云々 云々 云々 云々 云々 云々 云々 云々 云々 云々

合 云々 云々 云々 云々 云々 云々 云々 云々 云々 云々

時 云々 云々 云々 云々 云々 云々 云々 云々 云々 云々

我 云々 云々 云々 云々 云々 云々 云々 云々 云々 云々

人 云々 云々 云々 云々 云々 云々 云々 云々 云々 云々

人 云々 云々 云々 云々 云々 云々 云々 云々 云々 云々

人 云々 云々 云々 云々 云々 云々 云々 云々 云々 云々

い今可の獸の頭のとちも知まればりり小が是ハ
りくよき法あるとや世切のり小法つりりい
相頭大なるへ異なり有増鏡よ政大臣法行小
大のそ城外法がし首段研て去きり見聞集ハ頭
毒残りしよ多しその医作人の脈をとり素性
人語ある云世よ名り此術治ありぬきげ奇物をい
ふとりや言いへるよすれむ犁春が物ウウリ此
異物ハけりりらうらうらるるは今人の云
職人此類あるへといつるはい今人のい○狐
つうい狐の怪をあると匡房卿狐媚記康和三年
洛陽大有狐媚之好其異非一初於朱雀門前儲羞

饌禮以馬通為飯以牛骨為菜次設於式部省後及
公卿士門前世謂之狐大饗す、康富記忘永世七
年九月十日丙子今朝室町殿醫師高天被禁獄父
子弟等三人也、此間仕狐之沙汰風聞然而昨日
於御臺御方仰驗者被加持之處二足自御所逃出
則被縛件狐之後被打殺依此事高天^カ狐^ヲ奉詛付之
條露頭云同十月九日甲辰後聞囚人高天昨日被
流讚岐國俊經朝臣同國被流之、是等狐仕之輩
也、^{此の法ありて}茶^ニ文德實録よ席田郡有妖巫其
靈轉行噉心一種滋蔓民被毒害^{噉心二種實類と}漫

茶羅となり實類茶吉尼名嗽食人心雖業通自在
糸者得福名為邪法漫茶羅中茶吉尼者如来迹
故嗽盡心垢住大涅槃所以名糸如天龍八部皆此
義也谷響集よ西茶吉尼ハ嗽尽の義歟

あは茶吉尼天の邪法なるなり著聞集よ知豆院

得り也れられる瓶の生尾を感歎林雜話集よ秋山公

の物語を記志し知有阿修り何事なりと

も思ひしつりとあれを世にしるむべに極めよ

あんり代行要とをしわ道飯綱の法を行ひ

しよ兼就志しるとますしハいつくあらも痛し

る下乃屋の上よ飯中付分よ孝ありて鳴又あり

り也路よされよハ道風木ありし也之と有又其

以果心なとハ殊よ怪志さ業成なりし也よ嗚ひ

しり酸翻隨筆に松永久秀果心の術を試しと怖

志く堪るの事代りひし此居士の術を志す也

乃を人の所に見しる者山人の臺雅の時流

りぬと有貞徳独吟百韻月うけよ長三刀此志

ハやり新也しつふの法此おらふいの自証也い徳

いりと和訓琴よいづあい飯綱と書或云稻荷

の社よハ飯繩としつ物をらづ垣よもつるより

名くとしり又奥召仙臺飯綱山よ祀る代りと

飯綱三郎と呼といり多しの三郎木下三郎よよ

尊御發祥康熙二十三年
十月江撫湯公賦上支五
通五顯劉猛將五方皆聖
等名子荒誕不怪也
トモ志ク毀テ像ヲ去
八洲ニ投テ木偶ハ火ニ交ス
川吳郡數百年、惡俗、朝
聖、公、愧、不、ト、イ、リ、
述異記康熙丙寅江蘇
巡撫湯公奏除華嚴寺祠
祠宇及人家所奉者悉行
撤毀長福遂絕

りたる名は江南木客傳宋洪邁大江以南地多山
而俗機鬼其神怪甚詭異多依岩石樹木為叢祠村
々有之二浙江東曰五通江西閩中曰木下三郎又
曰木客一且者曰独脚五通名雖不同其實則一考
之傳記所謂木石之怪夔罔兩及山獾是也李註東
京賦云野中游光兄弟八人常在人間作怪害皆是
物云變知妖惑大抵与北方狐魅相似或能使人作
富故小人好迎致以祈無妄福若微忤其意則又移
奪而之他この下は十餘事代載たり多くハ美男
子とあり婦人よ通るより代記より又其内

よ少拂之即擲沙礫亦くハ江戸近きありな
り池袋村狐怪よ似たり但一江南無野狐と北夢
預言等よといひくハ尋常ヨリツキの狐をいふなり木
石の怪乃崇りとも其類ものなり五通よもあ
るるべし京師鳴瀧妙光寺よ十境あり其内よ五
通窟といふり何し鎮守稻荷をいふ是ハ開山法
燈國師宗よ行く稻荷をいふありあましくハ
そより其地よ何し稲荷をかく名つけたりん
めきくよあり名行るべし上よ引る東京賦註
游光云搜神記よ木精為游光ある是なりく

いとはやいさよハ日本紀ニ常世神と云を
祭りと富を致そといひて衆民を惑ちせし事
り是西土金蚕の事代男傳といひかゝるものと覺
一金蚕ハ後世の名あり漢の時乃巫蠱これあり
べし又漢土より箕仙といふ物代召降る事
の吉山を問ふこと有るは扶鸞といふ五雜
俎ニ箕仙之卜不知起於何時自唐宋以來即有紫
姑之說矣今以箕召仙者里巫俗師即士人亦或能
之大率其初皆出於游戲幻惑以欺俗人而行之既
久似亦有物憑焉蓋游鬼因而附之紫姑神或ハ
子姑

記し狐の神あり異苑にハ紫女といふ事つり其名搜神
記に狐名曰阿紫とありこけりといふ事つり

虞初新志洪若臯此仙記に此或作叶典稽同ト以
問疑也後人以僊降為批此名之曰此仙亦謂箕仙
又謂之扶鸞云といふ此名善の名なり箕と此と
音通なり
一 直道録云世人取桃木作此以降仙云此振凡
三下作字云扶鸞ハ秋坪新語十二善扶関帝鸞有
扣必應云聞紙沙々起落疾於風雨これ同物異名
関帝其名ヲ執スルハ扶鸞ヲ迎ヒ志ト聞ユ
よこそ〇大神蛇神醜醜隨筆云四國ありに大
神といふ事あり大祓をりたろ人たれ少くも
にらりとありハ伴の大祓忽つきて身心悩乱

志く病をうけりハ死をるといふ以り形を道
理と云ハ先その國の人犬神といふこと成常
よ笑を好くおそるく思ふ外感風邪山嵐瘴
氣乃病の然るれりハ死身心くるハ身ハ傷
乃却却よと病人も病家も思ふ外犬神の事此
之口より里の志く成されそこと成り此物
志く山が中一の者歎くむくこと成り此物
ハあぬここのいひくこと成り此物
形も病も死も人多くと彼國よ志く此物
此物此物此物此物此物此物此物此物

國西國のあつた地神をいふ人よつたけりや
死をくむ又女神とありけりハ搜神記
上卷 崇陽郡有一家姓廖累世為蓋以此致富後取新
婦不以此語之遇家人咸出唯此婦守舍忽見屋中
有大缸婦試祭之見有大蛇婦乃作湯灌殺之及家
人婦婦具白其事舉家驚惋未幾其家疾疹死也略
盡すハ吳震方嶺南雜記 上卷 潮州有地神其像冠
冕南面尊曰遊天大帝合今統龍中皆地也欲見廟祝必
致辞而後出盤旋鼎俎間或倒懸梁椽上或以竹竿
承之蜿蜒糾結不怖人亦不螫人長三尺許蒼翠可

愛聞此自梧州而來長年三老尤敬之凡祀神者蛇

常游憩其家甚有問神借貸者今三峯の神と似

は○屠龍工隨筆といはにその限らば

らざる密あり法大く抑て蛇を何用入る

よ崇めて法大く抑て蛇を何用入る

ら甘れとれぬれ心熱を送り心悩病愈ると

州と首ハ誤くちなハとて安養地邪あり本

々ウベウとり人家より他人よつて災

をふの猫鬼の類の比と邪備前兒嶋の狐の如しり

鏡聽鏡石占関帝籤不致過占算口占占

賣卜者の祥あり強占夢合夢占夢占

一富士二鷹貪三無四無五無六無七無八無九無十無

鬮とくとりハ籤とりる字書よ

鬮手取也とりる猜枝を藏鬮とり下学

集し鬮不見而拈物也續日本紀天平二年正月

令採短籍書以仁義禮智信五字隨其而賜物これ

鬮取なり南朝紀傳正長元年正月畠山満家石清

水よ詣て御鬮を取て將家此家督を定名し事河

り康富記永享二年八月十五日中山相公被參

石清水被取御鬮後奈良院御記天文四年二月

十五日涅槃捧物女中各被進如例年入夜名孔子
取也孔子ハ園の假字なり著和名抄祭祀具ニ玉
籩太之万厨膳具籩太之乃と出了字書ニ
七尖切貫也以下者又方先切細削竹也といふも
籩クニをいづも同義なり物に貫さるるとさるも
用多しハ清てとあへぬるハ古へより然ありし
なるべし今用る觀音籩ハ此の如くより里河
しものあり谷響集九叙門正統名菩薩籩云叙
其事者謂是菩薩化身所撰理或然云云紙園ハ
智覺禪師傳云二紙園を修し二願を決すると

あり漢土ハ觀音大士と園壯繆を殊ニ崇め祀
香火増家こ祝り考あり代祀
まゝ祠ハ必籩あり鴛影十一四一座古寺門
前一尊伽藍就是大漢関帝像柳友梅拜了兩拜云
仍舊祷告了就将籩筒搖上幾搖不一時求上一籩
只見依是樓雲菴的籩訣取事あり今觀音籩を
籩を親音籩を用ひことありなり関帝籩とい
ふハ河ハ東坡の他ハ八ハ船なり其ハ兄
しハ籩を占ふ羣碎錄陳今之卜者
以錢益唐時已用之賈公彦儀禮疏云以三少爲重

錢重錢九也三多為交錢交錢六也兩多一少為單
錢單錢七也兩少一多為折錢折錢八也といへり

陝餘叢考^{十二}以錢代著 條あり周^兄べ^一 | 玃といふものあり枝

とも藪とも又筭ともいへり物く演繁露

後世問卜於神有器名盃玃者以兩蚌殼投空擲地

觀其俯仰以斷休咎自有此制後人不專用蛤殼矣

或以竹或以木云いへり觀音籤をくく用るよ

款あるものありめや貞徳^う独吟百韻歌よをよ

折ぬ人の貧福親言れ占や當座の用なりん自注

らまんをんの占さくやいへりまると何るを哉

事の中うね進ハ今款占さく何るものそよや○

萬葉集^四 月夜^{ツクヨ}波^ハ門^{カド}出^{イデ}立^{タテ}夕^{ユフ}占^{ウラナヒ}問^{トヒ}豆^{マメ}ト^ト乎^{ナニ}曾^{ソコ}為^セ

之行^{ヨリ}乎^{ナニ}欲^{ホシ}馬^{ウマ}同^ト集^ツ一^{ヒト}玉^{タマ}梓^{シラカシ}路^{ミチ}往^{ユキ}占^{ウラナヒ}占^{ウラナヒ}相^{アイ}妹^{イモ}逢^{アヒ}我^{ワレ}謂^{イハス}こ

れ^レ占^{ウラナヒ}占^{ウラナヒ}成^{ナリ}ケ^ケと^ト訓^{ツケ}る^ル卦^{クワイ}よ^ヨ移^{ウツリ}さ^スる^ルね^ニと^ト

一^{ヒト}と^トを^ヲ又^{マタ}ち^チ成^{ナリ}黄^{ワウ}楊^{ヤウ}小^コ櫛^シを^ヲり^リい^ハを^ヲ續^ツ捨^ツ道^{ミチ}集

物^{モノ}名^ナよ^ヨあ^ハり^リつ^ツけ^ケの^ノも^モあ^ハり^リ櫛^シも^モほ^ホろ^ロの^ノハ^ハあ^ハく

て^テや^ヤ婦^メ子^コう^ウゆ^ユあ^ハけ^ケの^ノ占^{ウラナヒ}成^{ナリ}い^ハそ^ソと^トつ^ツく^ク黄^{ワウ}楊^{ヤウ}

を^ヲ告^ツの^ノ義^ギよ^ヨと^トる^ルお^オの^ノ法^{ホウ}に^ニ禰^ニよ^ヨ出^{イデ}く^ク黄^{ワウ}楊^{ヤウ}櫛^シを^ヲ

お^オく^ク乃^ノ祖^ソ祢^ニを^ヲ念^{ネン}し^シく^クる^ル人^{ヒト}乃^ノ酒^{サケ}を^ヲり^リく^ク吉^{キチ}凶^{クウ}

を^ヲ定^ツむ^ムとい^ハつ^ツく^ク拾^シ芥^{カイ}抄^{セウ}と^ト問^ト夕^{ユフ}食^{シキ}款^{クワン}ふ^フけ^ケと^トさ^サや

ゆふけの祓よ物とくハ及び人ようしほさよせ
よ、兒女子、云持黄楊柳女三人向三过問之又午歲
女午日問之今按三度誦此歌作塚散米鳴柳齒三
度後境内来人答為内人言語聞推吉凶あり万葉
十二月夜好門尔出立足占為而云此の是占ハ先
歩の數を定めむく歩の奇偶りく合不合を知る
こと今人のそらよ異なりしといふり田光大師
傳七四卷西山の善惠房証空加賀權守親季之子也
次我内府之猶子生年十四歳時元服せしめんと
そらよ童子更ようけがりそ父母あやしきそ一

糸ほり川の橋占とといひりる云あり橋よとそふ
説よとく占と云のこよて过占と同し法なり今
俗よ人のらちうを笑といふハ口占行俳諧
懐子五卷吹風の口占る志是今朝の秋泉所塚よ市
此町湯屋の町といふ知の过を占の过といふ俗
傳よ安陪清明この知よ占の書成埋しといふ
り今过占よ用る誦言ハ艷道通鑑よつけの根を
持く及祖祓を志し四过よ出く过やつち四过り
うし此市四过うしふし過うし此祓と何る
是く貞依り祭句よ过や过柳ようけふるか

といふ活用の語多れ共伴語と云はんハ算ある
一冊二番職人奇合雀岡職人奇合算木子有合可なり其
新なり一ほどの字一卒の因よ身をあらるはんあ
のもの、恨先の吾や判云算木子の述懐興は
とのううやの因さらそとた一はうれ修りが
うあの貝乃ううつあの家もうれあのれ身は
ありやハ不足行きまや五尺の身三尺のあ
やにもありのりんを信在しる一生涯の果
積も自身にうんかくぬんんあとしひさ
んあのものとはけぬらいとよくしひさ

りぬらあやと有は徳よあらるげ小興ばうのの
あり屋のうちよ文基在る算木子人をうり記す
り今街よ出しる賣十此古記さあり人偏判業
系業よ俗語よ占尺色一行どて信仰まるく
伊勢近江濃波前よ此まうれ有て諸國よ出る
中もあらゆきあらいたのうりり門のまま
にうきまりあく下等乃胃女成あるあり判
の占五音調子の占ありありや其徳のさあ
ハ樹の下よ席あり法沙の黒衣よ袴袈裟をう
け給珠と扇おて在旁にさあり成りたり

コレハ 菅原 氏 説 後 記
コレハ 菅原 氏 説 後 記
コレハ 菅原 氏 説 後 記

筮を用ひさうりーと見くく其のついでに貞享
元禄ころ此さ由に之を有知も出さうが修験
者の神なり貞享五年栄花咄よ山伏姿と成る月
待日待津一代の吉事判りんとけるなど見く
さうさぬと大う法沙の姿なり一室曆ころ
さうさ定あり俗形の藝ト考ハいと近と見く
西土よりハこれと課命とも起課ころいり鶯
鶯影 才十五回 只見一個起課先生手中揺着課筒
云 腰间掛着一人小々招牌上面寫道李半仙課精
鬼谷相善麻衣 看板を勝よつて諸方をあ
りててさうさ人よ忘るなり ○あ

いゆさ昆陽漫録云曆林問答板本よハ作者在方
の序あり之應永甲午孟春日正儀大夫司曆加茂
在方書とあり在方占此名人ゆゑ今も占者をあ
りまるといふとやといふありありあり
明の義ありそありとといふそありありあり
いさげりりありありありありありありあり
算正章独吟千句志まぬ座ハちやくいありあり
ぬまのう畳乃いりてるを相うげ修夜中山集
目録をりも妹ありありありありありありあり
とさふ占やさん又所卜あり菟玖波集 才九 ころ

といふは占すはしう色も一里火よむの
りささハくふ六條内大臣 中集よか
きれは多法まらと文上もく人得新やよと
小い庚占懐子集ハおひ人身よ志と待こ
ぐれ枕香炉の庚占錢も古に冠付いく度も灰
占苑の膏りり唐段公路り北戸録云ト之流雜
書傳虎ト紫姑ト牛蹄ト灼骨ト鳥ト雖不法於著
龜亦有可以称者按博物志曰虎知衝破又能畫地
ト今人有畫物上者推其奇偶謂之虎トたみさ
ん庚占亦ハ似しるをれり同書又云倭國大事

輒灼骨以下先令如中州令龜視坼占吉凶也こと
上古鹿の肩骨を投て灼て占相たるト錢傳ハ
トハや奉文類聚神龍中西京寿安縣有墨石山神
祠頗靈前有兩瓦子過客投之以ト休咎仰為吉覆
為凶とあるハ後よ筭杯トしるものハ又京房
ト易卦以錢擲以甲子起卦也ト云ふ投さんれ
り今世俗よ清明ウ投筭也ト云物三の小り小い
ひわしよも何ハ後撰夷曲集吉野晴明ウ澆よ
秋^{頭成}ウセよなんさんウヤリト云るウ亦清明ウ
澆よ落る本筭錢

中後八守武子向神... 醒睡笑し寺僧二十人づり何

る寺僧一寺法用の時位持觸をまり一方丈へよ
せ元借るふ上戸なり明鏡の産後を迷う申しき
よめいゝ大衆もくむくハ幸いぐる一申しん
じんづり園をくくせきめて一人ハ下戸婦人よ
せむハせ向は了意り浮世物語よ或主君の秘藏
そら物の俄よ死りるよ名黨ともの不為あらん
とさへく穿鑿有くれ在誰うまざといふはれ
らむおのうハせうく貧乏園をくくせ一人を
切服さるぞと作出されしは養耳草子貞享四年

一枚挿るよ此草子旧名ハ何といきよ大病の切あ

る事ゆり云は進神意よまうはるよ何ぞ神意
よまうすとといふハたしくハお人の医者を幣園
よ入るよ札三枚しきく一枚ハ白札しして死病
よ極りくくハ白札よゆが里終くと神意はると
此りハ白札よありり終りハ葉を引ひは死を守
りく是極を命し云或國よ山をぬきく一者あり
く三人そくくはれ共よ罪よおらありり
ハ成る至三人よ貧乏園をくくせく其内一人を

罪よおらふふふと作れ既よ一人極り
於付よ主事一右その園をいづゞせしむるを
三人よ園三つ内一死園あり一人ハあり一人
終あり園四つあり一死園あり三人よ
以て一死園あり一死園あり一死園あり
と此のふふとむれふふと法名残書なる紙を
仔細に抄法とむむと後くといふ紙を
いづるのふふとむむと一又観音をトと名付く江
戸五子村より一此小兒若此葉稻の葉ありとを
結ひくむむとあり吉事所のむむとハ紙拾

あゝ結ふとと法陶宗儀が輟畊録 卷廿よ
一是を九姑玄女課といふ其文よ吳楚之地村巫
野叟及婦人女子輩多能十九姑課其法折草九莖
屈之為十八握作一束祝而呵之而兩相結止留兩
端而料閑以占休咎若續成一條者名曰黃龍儻仙
又穿一園者名曰仙人上馬園不穿者名曰蟾窟落
地皆吉兆也或紛錯無緒不可分理則凶矣
是なり又一法曰九天玄女課其法折草一把不計
莖數多寡苟用算籌亦可兩手随意分之左手在上
豎放右手在下橫放以三除之不及者為卦一豎一

横曰大陽二豎一横曰靈通二豎二横曰老君二豎
三横曰大吳三豎一横曰洪石三豎三横曰祥雲皆
吉兆也一豎二横曰大陰一豎三横曰懸崖三豎三
横曰陰中皆凶兆也愚意俗謂九姑豈即九天玄女
欵離騷經云索瑤茅以筵筮兮命靈氣為余卜注曰
瑤茅靈草也筵小破竹也楚人名結艸折竹以卜曰
筮據此則亦有所本矣。無尽此記ハ宴會の條ハ
いふ明和の初この事殊々行り色々々々々々々々
て痛惚文集ハ無盡會稿序あり廻闔座敷餘物有
福張欲心中咒符不効云本闔否而欲心盛先鋒尽

而咒符起。或懷持佛飯粒又握鰯頭之信心よ同銅
脉が太平樂府ハ誦有懷一自掛山子每會出錢頻
花闔亦不中空掛常紋身山子と江戸ありり
山師くす同集咏時行物 驚美指論善哉餅孰知
私等鶉茶分泗場芝居田山講若是為何十九文四
山講ハ無尽をいふ無尽此闔ハ中らむやその
咒と今ハさうありとそ飯枚子と懐中するハ
佛の版より粘まる石塔の宝珠乃尖を打ちさ
て持行くともやあや此のいつくの寺にも
石塔の宝珠これ缺く全形のものあるもの

々物語よ云見一ハ今江戸惣昌ゆ急日本國の
人あつたり家づらり物もようつる三里四方ハ
野も山も寸土のあはれあふ一物もよ東南北海ふ
り小よ一系ゆりあごのこもる京田舎の者やも
此よ一系成足立り物もい町をたてんとよ一此
りり物に言やりしちみ家化りしちりハきこ蟹
の身のそれりしと定をりり恒れくるがど一古
かよあ一系の刈田のおもよもひちりといあつ
きりもやき成りしちりんちよも一しちりいセ
此町よらそとちりひりりしちり日成進ひ羽をか

さぬる小島つと此町惣昌きるあまのりり屋成
破り西より東より南一町り一成り先本町
と号一系町江戸所りしと所塚町大坂町雲町新
町行りしと名付家居美しとあ新をあし一板がきよ
作りしり板又本町道中にあるきとあぐりにあ
けを町と号一歳箱とあし横所を刻能奇舞妓の
舞臺を立至毎日婦ぐく成りて是をきとせりる
此の物をも舞臺もひ獅子舞も撲降陽那色くさぬ
ぶゆ此あそひしとち興ト多れ語られこの事洞房
中共よ見ししと見る下文整りれハ要をつて
元代合セ考ふ成りし下文整りれハ要をつて

落穂集 享長五年以前
原野 一三三 合七二

あるに於て萬村に於て言者妓のちのひりて舞
臺を多く建ちて妓如とも能く舞妓を有るに
し言れよあるに所中繁華の如くよこ水に
く人を集むるに言れよ惑ひて身代に
もの多うりりれば言れ江戸よ至る
らるゝの議ありて女の数を認めあり
其時遊女に色を遊りて廿餘人
女百餘人なるありて其後長
ながりありて有る慶長年間
言者よ荒廢志ありて後長
言者よ

ふもの形を言て其興也
元和三年甚くありて傾城所の事
但し慶長十七年の
書を言て十七年の
言者よ元和四年十一月より
言者よ又事跡合考に寛永の
江戸所名を西田至又ありて
祿委細に記し至るに享保十年
里来由を書上しに言て遠
の事公衆に内福を言るに
傳十分に書出されぬもの
又ありて先祖の

わらわちやうと成老一つさく所とせしと成
らるは是を大妻と申りこの所あるのれ
ひあゝ人よいと申り成つてさくあゝと見
ふさあゝひのいと申りをいつげさくさんやあ
まよゝえらる上らうをわらわの君と申り是
をばらゝの上らうと申り記をうらけ
是は又吾孀物語の細見は同時に於くの如くは
今様をうらひらゝと申り扇あつたり一やあ
わらゝと申りを大妻と名付たり一品あつて
る成りうらゝと名付たりと申り又らつて

貧乏くて居るまごもりあつてを端と申りあ
むあり然もともあつてそのさのさの時め終
大妻も一にありゆきばもり又らふが大妻とれ
るさゝと申りこのさめ終りもりあつては
申らるはさく局のわらゝと申りあつては女郎の
うらゝと申りあつては大妻七十五人うらゝ三十一
人も一八百八十一人惣合九百八十七人と記を
り女郎の名大妻は跡あると申りさくより次
いよのつと申りあつては名又何と物何と命号の界
名と多くさく揚代は

昭和三十二年今新吉原ウツリマモ揚代同シカレシ
志るさく原本洞房記

又此以ハ布名の中〜三線三巻近き
着て咽のりハ此をヤカ当新町のハ此散茶ハ何をいふ
と百散二に三流りかくハあままやま散茶ハ何をいふ
り掃きるよ麓耳子五巻その家の下女はよ
茶をいくるみる三葉成ふらるをあらといふ
りこれハ挽茶よハあらば枝あらの雜りしる葉
葉成濃く煮く茶筥あらるく散茶と今
いふ葉むれいふ好ま葉なりちししりり
文献通考茗有片者即龍園旧法散者則不蒸而
乾之如今之茶五元集拾遺伝よ絶て一炉の散茶

葉味あつち〜一代男茶子は風
呂や者をいふ知ちしを飲せ浴衣此五さを紀
一代女茶子五相州益りよちにちしを汲て
諸艷大盥四彼者まど里の人らまぶらと揚場
よ茶一杯と吞ゆくよまむる三風呂あぐりに是
成りのまあらる風呂まの吉茶よ廊を出し
る内その如廊を散茶といひしあらぐちぬる
ぬとりし迷よハあらぬをやぐくまハ取りしる
骨董集よ自笑ハ内証鑑よちしを汲ていふ
骨董集よ自笑ハ内証鑑よちしを汲ていふ
いふ誤りハ又う茶ハ水成る茶をぬると志

茶

寛文の端女節ツラシ
ト異名を以テ飲食ノ條
イリ

目ありしが散葉よおされく是も金歩とある
徒流云元禄年中より后と致し子有る者より皆
系の古実なまひより后と致し子有る者より皆
教茶造り小ありたるが嵩対植如を乃家他り
れくも教葉作りたるが嵩対植如を乃家他り
つ家他人稀く近き江戸町表想捨子よ七
の廊ハ壁のウ同産届の方二方に如席並に三尺
の方又キウ同産届の方二方に如席並に三尺

社明く落百有キウ是より出入見核子の原武り
並又露地ありとれより密を演引を云
雑記原武大夫とれより三絃と堪終ある子善
席のくは初は昔遊戯か昔系昔よりハ衰へたれと
成りひく春ハ茶室のまへ花枝植く日記やうよ
一あり夏ハ蛇籠種くも成る一たる有極そのむ
うー女席のち中うち人をせりーてたる時
ありが西回至名を停止すハ昔系のおとろへ
乃お幼中うと思ひ一取なりし是上中の町此茶
屋あくとれく上り三味緋ハ女何ある事とや
は女々の風俗も昔ハ紅粉ありをむさ記す

今注女節のサキキ揚ヤチキキウケキ

やー揚屋女席の落少うなよあげや風とハ
ひあういをーきとよいひふー綴ハむやうお
よ引むをび何ーごーにきす記上うほまなまつ
まうらーの葉後地かちちうひきまいなる戎女
席とさーに今の風ハ綴ハ油うー先楯ハあーご
のその如くある戎二三枚さーかんごーとて色
々りやう戎あうる七八枚ーちーし天宮れよ
い日と下結うけ揚屋入とりふ事あうべあう
ふりーごれが小袖の敷をきる云々うあはる葛
屋蘭御店よ部糸と張れ出ーお所中のうひ毛

のとやうーがは後綴くちやう部糸此目取わう
れをりそく志く綴つけ是七といひー戎
糸糸のめつきやうとりひーが今ハ大方戎
糸其中にき歩もあり是秋のべとやういひる三
歩に雲も多うーまご海鯨の切賣と感云○女席
の風俗それより先よも於昔よ及バぶあー戎い
るり糸糸徒然糸其角ウ撰るといひ山ハ非古
山りとの小ま水長さ記やのあて也云今時のよ
色よらう綴るよもたうべ先肉をあう出さう
世界をさうがりのあーとあひうー戎たふ心よお

子先乃中ちてあしとあゆしし切里し其後ハ纏
 の袷りし物しとりふものもねく勿論二人禿と
 りふし物うりしうど及中なりくにさやうれ
 ー今ハ三浦の大夫ハ二人禿ハ全盤あるハ格
 ハりれ一人あり其帯志むく三人禿あり對の
 禿めと氣浅とるといへる毛風情里あさくに
 隣へ桑とのこま行やうこむりハ帯のりども
 ちもくむあさうなりー云類よかんざらば顔面
 赤くけ残きむもれものハははよりく一の巻履は
 色あてりさやう形りしハ人物よするにねるべ
 ー駒下駄ハ稗 遊女櫛をさるる天和日多多く

櫛ぐよさーり其後常の女ハ櫛をさるる櫛松
 の葉あまらうと云長きあま糸の風浅しひく
 牙せば大そでゆきとどっひつらさ紙やあつ
 をり又二櫛しどもあくゆきのをありの花せん
 でああるハ和貞享ごろのさよなるべし江戸
 の遊女二櫛さるる其後元禄よりともゆらんご
 ーハりさるる賢女心化粧ハ古代ハ身を櫛へ
 息を依りるを倣城遊女の風といひしよ云是を
 とちぐい息白粉色さるる口唇よさるる云口唇
 阿しハ天和のら海よりとるるり色道大濫よ

江戸遊女ハ多クサシクハ
 明和頃ヨリト見立原武
 記音ハ紅粉ハシイラサ
 フトシ櫛屋ト申ク薄ハサ
 ダラズ月ト云カライマキ
 フイトシ髪共庫ハ列ハ
 アラシキチキチキチキチ
 ミシ申リ地トキハヒキイナ
 ルラ申トセシ今ノ風ハ
 ハ油カクハサシクハ
 トシ三枚カチトシハ
 ヤウラシクハサシクハ
 リ賣アリクハサシクハ
 人形ト見ケケタシ天
 ノ能ト下駄カキマ

是を如く是といへば其のハ是袋をち記し
なるべし一代男六巻 如くも衣志中うはさき也
さすすは織の源氏紋所もちいさく并べく袖口
も黒くすそも山乃よとるぞうしそれは目也
記あり置る紙よびよりそのらけ記も今の其あ
しに見合おうし記事も有る過ゆるはいなり又
内八文字といふあやも中うも柔順の風之諸艶
大濫ニ先一巻の都の三夕各別世界の乃中へ
内八文字にういどし云の東海乃名而記諸系
いどし八文字に踏くゆくうられ長きりす成り
内八文字

内八文字 ○元文流まきと夫有るハ三浦金三朝
と玉屋のまき流云元文の年流を揚屋五朝あ
りを揚屋所よりあし新所より新所ニ丁めなれど
町ハあし本名海老や治右衛門尾張屋清十郎橋
屋あふちあし乃若狭屋庄三郎京町より和泉や清六
其後揚屋とハ皆破壊志く尾張屋清十郎此も揚
屋町ハ清宅志く三浦ハ正暦六年ニ家絶たり云標りよ金多里とい
小細見寛暦の初江戸所一丁め玉屋山三郎よを
史苑紫これ一人揚屋ハ尾張屋清十郎のまき
引揚屋此或人云遊如も延享寛延の頃まきハ

や玉祭の由りハ桃灯の如く光陰の桃灯ハ数白の
遊善院の由りハ桃灯ハ数白の
子細ありて其翌年の梅より葉を毎々燭臺に作
り花をくく仏供とあるは此説年月なるの在遠
もありとありつゝねくハあきむらゝ益のそゝ
ろハ世上一回なれば此里よ毛のそゝり家くよ
桃灯ハともをくく唯くくよ子細ありとせり
新ハ梅とあるべしそをよ引ら原武雜記よ元
のむらゝ女帝のちやうちんやりしと云たる時
西田翁名を停止せしといふる是れハこれと玉
菊うまハ家けどもいふはこれハ彼水とくしと

云くくひりの又神双子を有るは杉よ玉祭
茶室のちやうちん一やうふきよあむとり合
せて彼ら遊善より事記きりといひりしと云
ハ青樓雜話の説のこゝやく元文元年ハ吉黒の節
をつけし新築桃灯を出しそれより種々の灯呂
作する事とありしはるる玉菊うまハ遊善の神
童子を引く奇跡を引くか人々御玉菊考あり
何れと引く奇跡を引くか人々御玉菊考あり
春毎々街々梅を植るもハ寛延二年ハ然るも後
流云此廊々梅植るもハ寛保三丙年と云る思
ひ付しとくハ其始中の所の葉を新築と云るの

りより物をせむる考へ残りありとも誤りて艶乃
通鑑 卷三 よかゆふ千鳥の妬怙坊共云と何れぬ
字成充たり所言歌 吉原の たる 長根歌 たる 懺
の句よ取坊相連被上衣といふるハ心得よりと
より上衣を被 カガ とをばよりをりありて是又より
れ人のあり記ありて遊所よ通ふもの人め成忍
ひ編笠を若頭中よ懸鬚あどさ句ある中よ東
海乃名取記よ知人よ形ありと奥語の乃振を
あうつさ目ばかり成る出い此あり古画よも
多くいえより寛文ころ後若弟めよりたひくるる
る

一歌よりりき者のとんで記羽ありてはりど魚
うち隠し松の葉志くまといふ頃葉を乃ちと
きたまのりり合たまをりうつりよ
くま ウサギ といふ小歌想ま
ら ウサギ といふをり成りたりたる成りけふのお
んのとありおんのハ御字く諸説大鑑よ法
字を夫ハ彦右衛門よ吉野三浦よ尾山奉養よ
利生九多清よ夕霧そのの 神明にツル 四天五 神能 世の人
心三今世の所字の客 今も 俗よよ記色の成種
し御字といふ是れい免とばをりりありと

形中うきひ和國あとの大神あまの如郎買とま
はき下三枚袴きまのりよわくしてはおく婦りに
をきくは袴の三枚袴とりあハ三つ着よりあ
らば表と裏との間よ何よても物を記よ一枚入
るは紋りしよ永代藏一巻卯月朔日ハ衣うくと
て色よ記袴を縫うけし紋るるに白き紋羅のむ
つうくしに緋縮緬を中よ入く三枚うさの此袴
神襦よ引綿むりハありまきるとり多り冷
糸袴の練子袴きとく糸志不角点の句よとりな
中うよこの中うけりるり有里ほらる着着たてゆゑさそふあ落家も福田の

大井川又だて者りと寒うよ着さけーぐり里五
人胃の内がらるるのちあ紋中るらねよ二美あ
りつハ年う記時の風流あるさゆをりひつハ
人よ物とくまは紋りつり紫花物種初花なすけく
志き人のたといよりの時の花をうさ心もえ
よや大鏡五巻花ををりあひー君連続古事談一
時の花よてめりりれむは時めく人をりしよ義
経記よ花たりと出よ七壺河百首歌粗系よ
人ふ知つ本よ二度花をやもまのハ秋乃横のち
みちへり里と養和歌集白蓮枝もれくはるる

まゝとりの記あゆみなりともはよきも或や
りし諸能大鑑うゝ能も朽木よ二反花を何と西
野織尚志由ちんの市紫波の豆袋めく花を中り
しよ云古一人のゆゑ使を中りよ梓木よ玉次
つりてり代持ちり其志る **匠**これ玉梓の使行り
それより流し何よ備道人よ物持りよハ草亦此
枝よ付く端まり今まゝ金銀をて代与りて
あといひももゝハ花の枝よ付くやうしゝ真順
故實集勅を能の時花古刀行と巻修り句端に右
刀ハ如常右よ指く舞臺へさし向ひ其時座の毛

温故集危子一茶庄と噴つ花を玉梓と書くらしきモノ

の一人舞臺よりあし修て諸能ハ又花ハ右手に
持りしつゝ是舞臺の上あし流しゆりハ赤くゆき
刀花之外何を巻ゆきや者を取くやを也粟
田口猿乐記第四日六当りて狂言の初とよ芝
居より楓の枝よ経冊を結ひて機置のうららの内
へけし入付し云京童四条芝居の條露臺への花
の枝ハ巻よゆゝ代しやあし東海乃名所記よ
仕舞極よ贈り巻は花の枝ハ舞臺よさし何ゆき
危をあしそひあし忍くしり花の枝よ目録を結
付くも 元福十四 前中若より切録一ツ

小粒をみおし花よ出さく中ゆくさりればと有
ハ今の神有り他一昔ハ福玉をやりし多し雅
逸碎狂集打花巾普露酌月并當霞あり多くさえ
し里一目千軒紙と糸の幸遊所あり花を打さく
紙を出さしねを糸もありしあむりしより有と
く三半井ト巻下さく紙も毛もよりよりの紙
とねよえありのありとありは古し引物物福
物なりしありれ贈りもの紙をほりりそハ目
福の心あり沙石集よりし引物物と紙は物
うねえさくせしるし物引物馬行と美人

下も新つるさあり福ハ上より下へ福ふもあ
漢土より褒美よとありを紙纏頭助衆ありし
板橋雜記ありしとありし金瓶梅 十一回 書袋内
取兩封賞賜每人三錢さくの外よ又一義あり
色道大鑑花よさく下略し花と計しりし我
思ふ女ありさし合あり又ハ遣女この男に愛
り我承引せさく女希と密法して各別の女
我もありし心ざん女希とさく見を男此心よ
おれし是ハ節しを紙女あり又似城屋の女子
我抱るよも肝賣の志よ海よりされて花をせ

ケンヲ油虫トイヘリ吉原犬枕ニクキモノアブ
ラ虫ノカラサワギ京師ニハ畧キテ見トモイヘ
リ娘容儀草子ニハ板ハ軒繩手ノ茶屋ノ戸ヲタ
キテ遊女ノ見シテ歸ルナド男ニマサツテ京
ノ女ホト大膽ナルハナシトイヘリ。けんさる物
多成ソノ源太洞房語園ニ寛文ころ吉原との
外往^罪是の考見ハ一流水少歌クンさるの長む
成りコノエイデニにちりむぢドヤと有む
醫者ハ婦子長き卵をうけあふりて^罪列せり
成り長^罪中とソヒソリ治法師吉原遊^罪りよ

六遷信ノ遷心ヤ

又^罪は^罪て^罪く^罪新^罪登^罪の人^罪と^罪ソ^罪ク^罪も^罪色^罪也
ベ^罪ー^罪し^罪り^罪ぬ^罪ぐ^罪く^罪モ^罪を^罪成^罪り^罪ハ^罪色^罪者^罪乃^罪の^罪あ^罪は^罪ハ^罪う
ふ^罪ハ^罪ハ^罪の^罪川^罪を^罪と^罪ゆ^罪り^罪く^罪る^罪や^罪大^罪臣^罪葬^罪母^罪ハ^罪多^罪橋
の^罪坊^罪さ^罪る^罪の^罪長^罪と^罪知^罪り^罪と^罪唄^罪つ^罪り^罪これ^罪を^罪或^罪人の^罪考
治^罪子^罪彼^罪竟^罪又^罪子^罪こ^罪こ^罪ひ^罪ー^罪ヤ^罪を^罪あ^罪う^罪事^罪あり^罪せ^罪け
ん^罪さ^罪る^罪と^罪あ^罪る^罪城^罪坊^罪と^罪さ^罪る^罪と^罪割^罪互^罪し^罪元^罪証^罪と^罪考^罪と
す^罪ハ^罪ソ^罪ク^罪ア^罪ク^罪ヤ^罪能^罪履^罪ハ^罪多^罪橋^罪ハ^罪延^罪寶^罪より^罪貞^罪孝^罪也
こ^罪ろ^罪は^罪り^罪色^罪さ^罪る^罪た^罪お^罪ぐ^罪と^罪も^罪願^罪念^罪也^罪無^罪所^罪に^罪
坊^罪さ^罪る^罪畧^罪名^罪も^罪た^罪れ^罪も^罪それ^罪ク^罪長^罪ク^罪似^罪る^罪ハ^罪す^罪え
治^罪是^罪の^罪う^罪人^罪家^罪又^罪子^罪少^罪年^罪の^罪婦^罪人^罪さ^罪や^罪る^罪も^罪也

歳止。置や屋時ら〜地初花と〜白行り又絶^紀絶
六玉川金刻〜ハ如子行り〜あり〜
男のん〜女子を屋平と〜ハ使〜
きヤん〜と〜ハ使〜
る祠の福り〜る〜めと〜
音こと行り〜ハ吉京徒然草^寫元^記の〜
昔行りそれ〜引大じと〜
て〜ん〜と〜
を彼奴相致り〜
お〜ん〜
え〜り〜
十八年淡草寺此後菽と〜
ニ本毎ニ於主の丸を立〜中吉原の遊〜

故女舟ヲ云我奴ト云ク也讚朝記ニナルホドヲシラニナドモイヘリ

此時〜
芳潤クもよ勝山と〜
黒く長さ髪を白地髪〜
凡と〜
文〜
多勝と〜
山ハ山本芳潤ク方〜
り〜
此川カ城着との清〜
荒の〜

乃乃そのく彼死と生何しりやそ丹前の急ハ給
山より起りしやうふ女が流るにりしにせと
西都の菓子代男一巻棟切風と中と
左江戸のく母存飯前子風呂あはし時膳山とい
一歌由のく進不中保く装くくあとりぬり袖
口切ぬく流るくくあづる付く世の人子整り
く一深これよりぬく後ハもてとやし七吉あ子
あやうきくく俗世ぬりき有仙一法布の
と能くぬのくくやゆきとりて我師よとのせ
しはるるる

或人云一抜招の細見子也
番門方子大末宿山と有るの
山

助方エ門也大末ありハ角所若海や
小倉京町一丁目之南四座在
紫野町巴左下とありて橋山
ち山本ハ山に流るくその山本
ふたまたま山に流るくその山本
ハ山に流るくその山本
とありて後同名北大末ありし
此膳山より風俗一変者なりと
代ハ傾城の中子奴死しりあり
奴取あれとそハ折本男子行色ハ
女帝の奴とそりりりりりりりり
や志屋たつ事ハ好まぬまづ
しあれとそりりりりりりりりり

其後元祿中誰袖海ノ三谷ハハ自安ノ此身在
 ありと紫吹ノ瓦もあり今ハ皆ツ証も有る京よ
 りハもろの心やとく由く予之又云乃哲の寺
 此前ノ此ありと先々々々九の數卷行き時よ
 うハ又おろりぬきと有馬ハ水牙ノ庵ノ
 十ノ於くたうノ洞房語園日本撰謡ノ御高丸
 の急り以て戸引ノ駕籠人おられたりしり
 在夢話とれとソウとのありと有るなり
 一戸ノ何々ハハチノクニナリ

嬉遊笑覽卷之廿七

温泉 凡呂 芽吹 銭湯 さくろ 凡呂 湯無水 凡呂 兼
 湯 竈 凡呂 湯 女 凡呂 女 凡呂 大波 市 永代
 島 江 戸 外 此 茶 屋 者 比 丘 足 踊 子 臨 ころ び
 綿 づ 町 藝 者 利 せ り 百 蔵 子 舟 重 船 子 人 あり
 山 猫

温泉ノ浴も日本紀野明天皇十年冬十月幸
 有間温泉宮云々同十一年十二月己巳朔壬午幸
 伊豫温泉宮統日本紀大宝元年九月丁未天皇幸
 紀伊國冬十月丁未車駕至武漏温泉乃葉集十四
 ありり此出肥のりふち子出湯の云この豆柄
 形云々今湯河原 初花集 雜ありま乃湯子よ一の

取ルハヤ中納言社ノ方座
 後七言ノ夜ウケヤシヒノ
 知子モ千ノ町方ヨモヒニテ
 ナルシテ

ひ代歌中山集月のうぐさ麿や木末のさくも
程あゝ風呂吹とを息哉ゆきうけく垢をうく
之湯草の中少吹あれをト岩根亦集は名を清
つとり小若き人風呂吹と上手たれを云々今拙
ある中又或人風呂吹と新とよたてて入そ若く
るよ入風呂は後ふて三度去りさよふく堂く
と吹方根のふりか又芋と云々夷曲集 彦部類
不知めととのこ入ぬる風呂ハあり形くよせ
下向ひく程もいゆぬきを人雑詔は蒲生氏江流
士をゆく水もよつううたを包く風呂の火哉

焚き下とあるハ陣中水とハ便所を云々
水風呂あるべし穢湯とハ垢をとり人を入る
風呂と百物語よせんたう此風呂ハありあ
喧嘩出来るとの之若との髪洗ひ湯あふると
堂へ入るちり云々蒸風呂ハ有るに
其湯ハ有るに
よつ髪をあひしと鷹筑波集にこぬりま
ト里よらふる室を記そさうに七髪を洗ひふ
ろあがり又ソる人乃さや阿うむさく新風
呂今俗をさく新風呂とはハ望一千句坊
主ト子タル露ノ又レカニ傾城ノクドリ風呂曰

リアカリキテ同後度午句吹ハアツ風呂フハ
ケイセイ汲カヘテ持水桶ノワカサカリ是ト十
湯女ヨイロ髪ヲサバイテ帯レドケナシサシ
ぐニ吹クタビルノフロ上リイホヒサカリシ灸
ノカズ是ニ湯女ソイフナリ徳武家閑談ニ慶長五年伏見豊後橋ニ
銭湯ありク歴々の士多く入ク喧嘩者ト云
漢土の銭湯ハ七修類稿ニ吳俗甃大石為池穹幕
以磚後為巨釜令與池通輓轆引水穴壁而貯焉一
人專執爨池水相吞遂成沸湯名曰混堂榜其門則
曰香水納一錢於主人皆得入澡焉此方の温泉の湯

又永代蔵四巻江戸ノ下ヲ云処或人船ツキノ自
由サスル行水舟ト云モノラシ初タル下ライハ
リ今ノ湯舟ナリコレヲモ古クアリシモノナル
ベシ自笑カ色三線ニ京ノ処水フロヨリ湯フロ
カ徳ナレドコレラヘル下ヲ造作ニ思ヒ云ニア
ル湯フロハ蒸風呂之遺老物語永祿ニ来出来初
シ事種々ノ中スイフロ是ハ言麗陣有之ヨリ初
ルト云リ又茶のよめニ有る湯ハ病者発汗をむ
とく湯ニ入るを病ヲ栄花物語京都市風ありや
くゆてさや給ひ云々此外の卷も又ハ

字鏡は蝶以菜入湯云、奈由豆庭訓は五木本草
湯治風呂亦れハ本草は^え茶湯之貞徳文
集和月の文は其後市望之菜風呂焚可中ハ和歌
吟牙五ハ瀬の谷風呂ハ郊り^向の人^向の^向ひ^向の
る^向の^向絶^向を^向入^向け^向り^向極^向く^向効^向あり^向黒^向木^向と^向り^向ふ^向そ^向の
哉^向婦^向を^向へ^向り^向の^向次^向で^向は^向釜^向婦^向ろ^向と^向り^向る^向よ^向生^向木^向と
焼^向て^向そ^向の^向氣^向成^向ふ^向る^向飯^向よ^向人^向牙^向は^向菜^向ち^向る^向べ^向し^向油^向
加^向須^向土^向乃^向中^向も^向志^向ち^向ふ^向さ^向の^向音^向疾^向氣^向ち^向る^向人^向也^向竈^向
湯^向へ^向入^向ぬ^向る^向む^向紅^向梅^向子^向勺^向は^向た^向く^向風^向呂^向此^向も^向茶^向ん^向の^向
よ^向記^向ハ^向上^向の^向町^向政^向信^向遠^向ハ^向八^向瀬^向亦^向く^向幣^向ハ^向か^向中^向ハ^向季^向

吟今俗権ふるるといふそのも竈風呂之古記前句
集よおふり入るりく権風呂もあまうは^らぬそ
この息
湯女風呂といひく江戸は^らり^ら出^らる^らハ見聞集
卷四 考くろ物徳江戸紫呂の初天正十九卯年此
夏の^らり^ら紫^らよ^ら俵^ら智^らと^ら市^らと^らい^らひ^らし^らと^らの^ら後^ら瓶^ら梅^らの^ら
あ^らり^らよ^らせん^らた^らう^ら風^ら呂^ら哉^らハ^らツ^ら立^らる^ら風^ら呂^ら哉^らハ^ら永^ら
樂^ら一^ら勝^らた^らう^ら皆^ら人^らめ^らつ^らる^らト^らた^らお^らう^らふ^らと^らく^ら入^ら後^らぬ
されどもその^ら以^らハ^ら風^ら呂^ら不^らと^らん^らま^らん^らの^ら人^らあ^らあ^ら
ふ^らく^らあ^らる^らあ^らの^ら糸^らや^ら息^らグ^らつ^らま^らり^らて^ら物^らも^らい^ら有^られ

を煙あき目もあわれぬちどくしひく小風呂の
 口よ立ふさぐりぬる風呂を好むしが分ハ町を
 よ風呂ありむじく十五辨共辨はくみて入なり湯
 あといひくなまめりる女共廿人廿人ありび居
 く垢をうね髪をそくぐお又其卯は容色もくひ
 あく心さゆやうよやけしき女房ども湯よ葉よ
 としひく持来り戯走うきよかきうをたけ一度
 笑めバめく乃媚をあくる男此心を迷ひそを
 湯なふゆと名付としひく此時あきせんちんか
 もこれおとさへく又日見吹集六巻に戸子
 おみくをい風呂出あしこともくゆそれるに戸子

湯なふゆと名付としひく此時あきせんちんか
 もこれおとさへく又日見吹集六巻に戸子
 おみくをい風呂出あしこともくゆそれるに戸子
 和のゆを白べし色音福あやの女をやりとの
 云々寛永中おんく盛りなりしと湯女ハりし緒
 國の温泉よありしがりとるるべし太平記の以
 既ハ風呂屋よありしとろち落穂集ハ我ホ嘉年
 此以と右ハ風呂屋ハ市当地ありま有ハ悦ハ覺
 居中よりハ風呂ハ釣よりわりし晩方七ツ時仕
 旦中ハ昼ハ内風呂ハ其の垢をかき中ハ湯女と
 もそれより身支度を調へ着時分よとりりハ
 風呂のより場よ用ひるる梅子の多我座安よ

慶安五年辛卯二月
 十九日所為凡ハ屋世
 松葉買ハ後自今後
 可ハ身用ハ後自今後
 一歳ハ後自今後
 廿四年辛卯三月
 廿四日所為凡ハ屋世
 松葉買ハ後自今後
 可ハ身用ハ後自今後
 一歳ハ後自今後
 廿四年辛卯三月

女がいしやのゆゑ 奇縁ありとより遊女の所業
ある哉後よりハ其乃心はぬとの多くありしより
おのづらうせぬりとなせり一目千軒はち夫天
津三づり三線ゆりざる故たいこ女郎を呼な
り又藝子とりふ者外もあり昔ハちりしは寶
曆元未年より始りといはる大坂新町細見澤標ニ
タイコ女郎ト云ハアケヤ茶ヤヘヨバレ座シキ
ノ興ヲ催スモノノ音曲ハイフモサラニ昔ハ舞
ナドモツトメシモノノ享保中ヨリ藝子トイハ
ルモノ出来リコレハ昔ノタイコ女郎トハ訣チ

ガヒ三ニセンヲ表ニ立テウラハ色ヲモトハス
ルナリサルニ依テ美女アリツトメ方ハ月シサ
マナリ江戸ハ大ニ後述たり後ハ昔物語よりハ
る此藝者とりふとの扇屋りせんは始り歌扇
ハ唯一人なりし宝曆十二年の頃なり其後退り
よ郊の娼家も茶店も出まゝ細見のやりて
の茶の処よりいしや他外にも出し中ハと云ふ
りまらりちるり後ハ大黒屋秀民らんをん哉立
しりげいしやおとま子と肩書志く傾城同格よ
見せよあづて客をせりしは娼家もあり此あり

とち務述するを十人計ツ、かゝへ動て酌
せ山家うゝり世三縮を彈鼓を打て後ハ以て
とむとく當世をゆる伊セ備云く風流なる事
谷の拙女も仇をうそへ葎をむゆる花車屋のお
ちめんおまんおりさうやのお花中をやのおて
と住吉屋のおうんあどハ御字をやとりふ一蝶
や信香とひひとけりしけりける袂国の遊小の
袴の中よこの花車屋の果ありける袖きとる女
門は西雀置土産江戸の串枝りふ処清水町の
かゝと祓而く酒者としてけりさぬくけりもお
り又源川八まんの茶屋をのハ本不葉地より

清水町ハムカレ谷中レシッ
門、辺ノ町名トゾ本野ニ
今コノ町名アルハモト法恩
寺ハ谷中清水門ノ辺ニ
アリレカ引タルヨリコニ
此町アリトホ人トヘリ

ハ各別見よげよ糸の祇園所の志うけ禊あり
多所の内ハ二人を分外ハ三人を歩と極先
も物うさし三谷をむ川うき女う斗うと物
へハ新町うけり紀暖簾のハ祓を女舞で
ハ百よ定めらる一代男ニあやむるけり源川
のハちん葉地本不の三ツめの橋筋めぐるのち
や我さうし志系川の志んとび白山さん傍の志
志込ぬその浅草橋の内山くうふつく事おち
うつらんしてこの内布不三ツめ云いづるハ
るべし今よ夜祭の歌多し室席ハ牛馬
馬文耕り書る武聖俗談入江町の志城りひと

本町長岡町西カハ長ヤ
 ラ土人方言ニト云ハ入
 江町一カヲ上トスルニヤ又
 云下ノ長ヤヲツキウツ
 呼リソハ今ヨリ四十年前ツ
 ノ長ヤノ前今ノ如ク大路
 ニテ下水ノ溝廣クシテ
 処ニニ踏板ヲワメシテ通
 ヘリソノ形テツキウニ似タリ
 トテカ呼シテリ家ハ二棟
 ツハナレタルカツヤ高低ヒ
 トレカラス家ノ間アキタル
 処ニナ葎カヤ生茂レリ
 浅草マシダラ堂火事延焼
 ノ後溝モ狭クナリ家モ
 ソノ端マテ出テ今ノ如ク
 長ヤトナレリ

田堂前入江町カ子ツキ堂トテヤクザバレヨ
 イハ氏ハンジヤウニ随ヒ今ハ板列御次おも多
 く四十一御次女ハ御千三百願あり其中に甲
 吉原の産お持の價は異なり今此處にツノ
 量甲お持の價は異なり今此處にツノ
 一云こりへり品川の軽きざの程あり又若
 浅草駒りとの茶屋賑りへり神田貞宣り浅草船
 遊の記は道春記の如し此門前より女の牛鬼出
 る走りりるとも書り尤不富くそを侍進今も駒
 りとの茶屋を見出バ虫女とおろして負まハ
 白粉を鹿子まぶりにぬりちし眉を黒く不
 二の形を眺めたり契ハ楊柳の春風を痛く声お

りしてて桃子取る法人を汚し金銀を貪る是女
 の牛鬼とやリ小座敷此記百治の紫一本並木の
 茶屋や入るよ左右の幕の内古ハ出茶屋
 りよりやきぬくとよふ声よ付く入るとよ年
 のよりひニハをくりと先としく光りやく玉
 りつゝかともゆるもあたる深小袖をを廣帯尻
 のとがりよ引りけくせんをやり戸をおし明く
 お容おそし是待とむ哉云と先廿百後を足おと
 んと廣小袖を西へ新女下茶屋あぬとの茶屋を
 そのとろく今世新の茶屋と唱ふ又並木と

うゝ里りる婦くやうふはハおあつおをふおく
ふと云ありそれをむとつよよめ堂りへは是供
りよむ花の色ハ枝のあひくつけて程ありあくよ毒風のふくやう
ほり此おあつりーやよ赤し線しはせ共せ酒しのお手しに
ありし口比丘尼ハ同書赤板の條うら借る町へ
出さる小下町めつゝ町うゝ来る比丘尼風流よ
出立る云こゆゝ流を咄バめつゝ町よりあゆこ
来る比丘尼の中はるも永云お忍免おあつ去借
と中ら爰りとして名とり小てハあげやハ仁多傳
安多傳と中さるきれ以ふるハ今此少袖りゝと

う然宿つき若とぬき去てゝ阿うーちぐー信ち
がこ白さゝしうとんそめあもみの袖はうゝ見
ううけ黒ーゆ以茶ーゆ以幅廣帯黒羽重の投取
巾又ハぶゝして包むもあり小比丘尼供よ流也
是よ敵とゝセ市川流の取り去るゝとし不奈の
大事のふー云こ比一代男越後板田の條うゝ見
出りかちん深の布子よ黒見んの二ツ見りま
へ緒ひあーて阿のぬハいいくにるも同一風俗
こ元これハりゆの子に成る身は阿はばり
以りゆおアやのこにあるくは女は日はお
手もさくめは百人とりひもおうとはせハい
くは戸めつゝ町まで思ひ契りとめハせい
るんりはさー米りこは村ハはげはりありありあ
るにるしがちやくもははありぬ云こはせい

めつゝ所ハ寛永江戸系ノ神田ナド所新カ所
南の方ニ丁取リ是今ノ多町今ノ名ハ略名
と略名アリ今小柳町也此丘尾核東海道名不
記小田系ノ條比丘尾共一二人出末ノ家哉
ふ云々強ク記を志ス以吾哉ウんヨクヨ以みと
リノ眉不そくヨ以水志ウ一齒ハ重ヨリも白
く手足ノ胭脂をさ一紋をテ我ツけ逢ドモんり
く凍セんさいちや黄ウチや云々白ウチヨウ
世黒き帯ヨク一裁ウけ裾ニこれウウウ馬
不ウしヨウカをオチヨクヨこれハそれウ状
オオヤ母風ヨアリウウウ似城白也ウシヨ

形ノたりノ人倫訓蒙図彙ニ比丘尾ハカ
リヨウガリノ包ニて小衣をウヤクし齒を
歴ヨウ裁巾寮ト号シ夫ハ山伏ヲ持女臺ノ
町業師ノ系子ニ傳ル好色徒然茶若ハ小者
皆是末世ノ誤ナリ今ヤウハ人ヨウウ容キ
との遊りのありしが今ヤウハ人ヨウウ容キ
らひも其れウと御遊リウグニ町八ウウん町
とヨ宍あり日毎ヨウウマけウ楠町事所ハ
上品ト以頭中ノ針サセるハ鉢者ノ苗ウウ
を源太郎トシ比丘尾米尾の古子古云寛
延寶暦の初ウ海志ト勅を比丘尾モ表比丘尾

コレヲ異名ニルタト云元禄六年野郎評判記ニ空籠傳藏拈九七履指作内過夜鶴

あり芝八官町新田横大工町あり是より
く下直なるを涉茶田系町曰之瀨門前新大橋川
端あども家毎よ二三人ツゝ出て居たりとぞ表
よ考記葭篋と立より篋絨端帯志なりとく化し
凡俗夕比丘尼涉英よ戻る日和虹賣れぬさ記
よ遊女し如ら小紙をつゝ柄柄ぞ小倉うぢ付く
六玉川比丘尼の化粧よしびりり見ゆ〇上より
る一代男諸妻としいひるよ四ッ谷新宿としい
以て以ハこゝよ飯盛女とハ似たりしに也
神海護國寺門前音羽町四谷の新宿板橋品川子

住の色茶を堀町の裏筋ありこの下八貫町の比
丘尾尾も百よ三人より一人一角まで有宿ハ新
保五年故者て廢やて又古来の通りとてや五
九年新飯とて女百五十人出た多きとて歸橋が
安永九年の草子よ今岡場如の多きとてつお芋
のふえとてとく中よ今よけ旅りハ北と東と
南なり鼎のとくとしひとけが次第に西方盛東
北ハ破のごとく争ひとて音羽町ハ原武の雑
よちやりのあつとて争ひとて音羽町ハ原武の雑
記よ下司の格投をりてお換屋ありと茶昌の時より
ハ下司の格投をりてお換屋ありと茶昌の時より
呂川の事保中妻神風俗ハお換屋ありと茶昌の時より
もあふとてと川といの合のそめとてとて
音羽町と品川といの合のそめとてとて
北ハ音羽町ハ吉系風流徒然茶堀町木枕町品川
よ脇ハ音羽町ハ吉系風流徒然茶堀町木枕町品川

正徳六年四月十六日
護国寺門前音羽町名主
八幡方の家規に因り
目平型屋吉三神ト
中茶屋女抱連之
存今野能堂寺振出
内考合ふり方名
主役と百放音門と
又翌年享保二年六月
十三日音羽町八丁目善八
店仁多様ト中茶屋抱
女二人有之為り為人
享會と付

享保六年辛丑三月五日
板橋町三為三月三日捕
抱女二人吉永町ト下
右節と共サ小ニテ
夜夜と付
下谷龍泉寺町赤坂
持了所形所松橋町
永代も所松山町
何れも有之御役人
ツ以方三形小代キ不
へ老人ツ立合
同年六月下板橋町茶
抱女一人捕音系町ト下
同九月下音羽町久多町
際賣ヤミ子有之非
田永井町妻女二人

享保七年四月二日
音羽町橋尾治屋
抱女一人音系町ト下
同下月下音羽町抱女
二人吉永町ト下
同八月下音羽町
町前之云下地妻女
二人吉永ト下同下月
共々新中音羽町妻女
十四人新音羽ト下

護国寺にも新人あふさるる此ハ比丘尼夜鷹
の影を際ちるハナリ江戸枝折子音羽町たつる
十一年集之此以廢招津の茶屋女も集り殆ど
るが子足希く息よ而折玉く志くつるる花
した那さハ茶やとのうあふ踊子哉かとい精
を日よハ比丘尼と我志云々かといひといふ
原本洞房語園享保近年町ト踊子といふ者時
是出く寛永年中九二ウ類ある寛永トハ非之
之音妓の女よ給あなりし所よ是又中停止よ
て漸止りるとハリと其後又を也り江戸名

物盤舞子あり祭句よ加茂て若る夜を舞子此要
うふ我衣よ寛保元年踊子停止せるといひ
者乃鼻祖なりと見たり踊子此ハをとり
べ。谷中いろは茶屋ハ江戸砂子よ感志寺門茶
よいろはと書るの志く水茶屋敷十軒あ
りしり今ハ見らば一二軒も有る堂ソ屋り明あ
二年川柳点いろは茶屋醫者たり初とあひハ赤
一。蹴ころろ古云比丘尼志くれく出束
り天明の末と下谷慶山御所教音屋所抱灯店佛
店慶寺茶通浅草堀田系其外後承よこれあり

艶道通陸三白人呂州茶や鼻や間短蹴倒夜祭迄トアルケタラシク

こ北も一軒よ二人三人ツ、出居出り祀費を式
百文ツ、あまりのつちも容息を撰て出ると毎
月大師縁日よハ未明より出居より昭和年間江
戸名物濫山下こん敷膝んと桃子足丹眼やこ不き萩
と有り是の夕べし寛政以来これ。凡来散人
志道形傳宝曆十三 松小をいひ并ぶよ神明系
の帰足ハ本地垂跡乃両道よなぐこ湯治の二階
ハ千里の目越きつめ英町の向側ハ隣よりも又
近しよこれをつく茅切町スガ目もまどる神田の
明神およなりれを市谷のハ橋元天満神のあ

りよ近き室ざねの梅も折むと麹町よハ寐る哉
形こ土着とれぬ土橋より一ツ目山猫あんとい
つねをさねうゝ化その、名よ近し所りハ述ハハ
呂川の風流女獲り治の辻ありと美ゆる肴板よ
偽りありそ海深川のむんちやんも度りさ形造
バ館のまゝ和ヤりて齒よつうぬ大根畑の居つ
け紋ヶ橋へ走つて鞆コシのつある隣つき堂カガ借つ
跡であいゝ橋より千住とソハば観音めりる万
福寺の恋を朝鮮七厘の異國うさたいろはぢ
く谷世尊院人を引どれおらん寺町ハせんたま

らぬお旅のさりけ三休の音ぞめ比音羽町り
 り明くく寂を初傳の東の空も赤城より暗きよ
 迷多藪の下通ふ足音響りあり愛敬移舟の狐よ
 り化ぞとまひの市多傳町の氷川の寒空ハ娘
 るあゝ通ふ朋坊町丸山の丸床をぐと新大橋の
 ぢぢく志紀三十三間堂くよくにみも一産哉直
 助やしき出る舟あまハ入舟町石塙よはくたは
 下海をく踏返したる丸ちの名物立ると伏くと
 跡の舟中ちぢに飽もなく夜鷹よ羽ハたは
 れせ皆それくのきだりひハ考さんて天よ到り

奥瀬よととり子の気色ちぢ跡方けくたはめ
 ヤば云く丸ちハ比丘尼の異名とまの不角カ点
 の半に愛後ハ昔物濃寛保元年とるちやりおと
 川内よ傾城湯女白人躍子呼出山猫比丘尼飯
 盛綿摘夜鷹蹴鞠舟饅あくの如くてよとはの一
 向な記唄も此ころのち之振るよ宝永六年己丑
 六月廿日町中よ遊ひ女と綿流し振と名付隠し
 意り後前より停止中付り地以日根りよ賣女
 ちと差をりし振おまふ扇と云く今藝者と
 川内女ハ昔の舞子の名残なり又をとり藝者と

安永初ヨリ江戸新大橋
 際三俣ヲ埋立新地ヲ築
 キ是ヲ富長町ト名付
 セモノ芝居茶屋トモ出来
 夜ハ灯火多ク點テ夏日
 納涼ノ勝地トモ賣女
 ハ多ク出来ツ是ヲ地テト
 呼リ折テ新吾系町類
 焼シテ坂家此ニ後宅ニテ
 イト賑ハシハ程ナリ居
 住ノ者共ニ川料金賜リ
 不残退拂ハレ其ノ下寛
 政元年正月下旬より
 掘始メ翌二年戊戌月
 上ニ畢リテモトノ河ト成
 此土ヲ以テ深川石塙ノ
 築立地出来マテ御島ノ
 端ヲ埋テ人目ヨセ塙ト成

ハ涼川の乃い志やよりソ小明和七年の冊子辰
己園藝者を喚起とソ小知をとりし志ありや
り堂ソへりりと女世をとり、哉先とる故之豊後
節をゆりて此風起きり下午談義娘んどうり
此こと哉り小知ありさく女が阿るれもない
を織り裁きて振差さくさくぬも折ふし見ゆる
そりし若ハ塘の舟宿の女房がりりぞおとり哉
さるる今ハ大てい小家の一つ折も折るる宿の子
も女のある身一さお織きやた親親の心おしハ
りりぬこれ乞悪人のさるる折そや昔女郎りた

るる余明和二年川柳貞お免りけしう親ぬ志
んと哉近知の出その以橋所は女藝者〇百ざ
徒流云中江戸町到丁めの海巻と下糸の遊
女ありるる小新屋やりの店山々二新打後より
燈つツを用ひとり俗は百ざりせりひりる云々
いなりざるとハ何の義より男ふよ豆花ふとの
俗より房あの方言よ寄居表をぐふざると云又
蛸よりくざるとの名あり陽物哉さくざるとソふ
も同一人の名免りてソふる之坊とりふと
似たり〇里の寛文ゴロ一人崩五トノケンシ食出キテハケイヤイ評近年提籃と称するハ

寛文ゴロ一人崩五トノケンシ食出キテハケイヤイ
ユトナルラケンシヤ即トイヘリケンシハハ
提重アリ今コノサゲ重ノ名似タリ

持をとびの手離きよりしひをド先山猫と名付
一ハ化て出るとりふちぢむ又地獄とある名
と一ハと袖法ちつとりつるその此ち哉企乃
る哉箒根の法ちつ地づくにりをつきて仲る
の考の合詞よぢどくとりひしより今ハ名と
成りし此説附會ゆり後物の名も亦より
りりる之浪茶ふく惣嫁伊勢の名お遊女云物類呼走りり
自古市にくあん艶女もやとりふ伊豆のち田よせん
却り者松橋より総ん石有丹後よ志やうかトハ漢ナレハ走ルハ船人祝詞て
後よ次水ヨハ旅人此処ニ逗留ノ内ナラフウチ夫婦ノ如ク此家ヲ浮身宿ト云ハセラカ句ニ遊ニ至テ志キテ浮身宿浮身あ銭のこ阿り長門の萩よりま

はよ下の冥ふく手拍とハ舟をこりけく手拍と
く肥後よきぶし長さ記よヨメカちいちちあり小女
子性あり信女上田よなざい阿り松本に張箒あ
り加多よ化名名護屋よりり出ぬ秋田ニテ松餅堂
ちその袖女せとひ餅を賣りる故屋名とハ成
るる之津煙よりぐんほとひ南船よりおしや
らくと呼松茶より茶権とりふハ尻りおんとい
ふとよいとるいととの差別ハあれども情を
賣ハツツ之。船おんぢる洞房語園乃ぢり饅頭
賦性一石治の以り一人のおんぢるこち哉打く

近江ミナソウ、越前敷敷ミナソウ、ミヤウタ、ウラサラスト云ハ

正徳三年保中強一賣女共
捕シテ吾原町ト下ル
可成あり又延享三年
寅二月十四日巳前夜
年中吉原町ト下ル
控女井宿定年季明女
殺死出深川御所日大
和町氷川門前百七十八人
根津宮永所千人木所
入江町一人市谷町七人
津田小泉町瀧子賣女
十人ノ六十八人北高川二十
二人ノド見エタリ

乃属あり人往て是と呼バ則来る常は何レノ者
と知レバ宝曆中のさぬえむりとも又云呂川
ハ北里ニ似レれども多くハ結び髪少く眉毛
甚ルんなり人ニ馴むより上るり徳水どもニ
縁ノ阿ぢ良〇深川新地ハ六玉川ニ新地の間丈
子蚊柱り立新地ぐんと敷ハ明より新地の
枕石よたつる新地の立地ニ赤い物ヲ彈より
因果新地掃きる寛延の以漬まじり明和七年冊
子吉原深川を兼へり小内登三あれバ仲所土橋
あり、折附あきハやぐろ下佃島ありふれおんとい

寛保三年亥四月六
勅進比丘花藤成衣
類著賣女伴給浦不
届ハ右中宿ホ致り去
有之ハ早く可訴出
上由納アリコレヨリサキ
室永三文年ニモ由船
有之トゾ

江家次才八十島祭日
到難波津官主祀檀
云々終禊了以祭物
投海次歸京於江口
遊女参入纏頭例祿
如恒云々

折集抄治承二年
長月、以アルヒビリト
伴ト西國ハオモキレニ
サレテイソグトモナキ
終ニ日ノ飯クモイソガ
スレテ江口ハモトナンド
イフ菴サカ住居ミタビ
家ハ南北ノ岸ニサレハミ
テ心ハ旅人ノレバシノ情ッ
思フサマサモハカナキワガニ
テ云々アルヒビリト打語ッ
ツ、ソノ里ヲ過ナムトスレニ
冬ヲ待テ又村レグレノ
ハゲレクテ人ノソトモニ
立ヤスラヒテ内ヲ見イ

古へのあそび、傘とさげごと、似地系物
此り一車、宿系の新涼、おろせ、島系人形
之セ、書、川いさ、町賣、夜々セ、やとり
灯呂、大ま、天神りりひ、半歌、端高、暖簾
廊中昔此さぬ、伽羅、衣服、若流女、桶ゆせ
朝立、壺入、ひぶくろ、大門口、ぐまち、ぬめ
あゆ、さざくれ、のさばる、大鼓りち

遊女をうりれめ又あそびとり栄華物語松の
あつえ此冬二月廿日天王寺に詣てさや路ふた
のめんをば一院とぞ人々ヤルも後三條院ヨも

レ侍ルニ主ノ厄ノ時雨
 モリケルヲワヒテ板ツ一
 サゲテアチコチ走りアリ
 キレカバ何トクカク賤
 カフセヤラフキツワラフ
 トラスギミタルニ此元サバ
 カリモノサワカレク走りハ
 ムルカ何トチカ開ケハ板ヲ
 ナケ捨テ月ハモレ雨ハトマ
 レト思フニ
 又對古今集ニ天王寺へ
 参リケルニハカニ雨フリケレ
 バ江口ニ宿ヲカリケルニカシ
 侍ラザリトレバ流侍ケル
 昔ノ中ヲイトフマテコソカタ
 カラメカリノヤドリヲ惜ムヨ
 カナ
 母ヲイトフ人トシ聞ケハカ
 リノヤドニ心トムナト思フ
 ハカリソ 菫女妙

中免り女院も一品のちやもあつてさや給云こ
 廿二日乃さつづの晴づりに水船りごとく
 せ給りども江口のおそひぬふ秋をくり糸
 りぬくぬどぞ給りせりる源氏物語とほづ
 此等社系のうさ給は田笠の鶴の阿さり上畧あ
 そひ其のつどひ糸巻るも上達給ときこゆれど
 こりやうに玉虫のぬいげあるハさふ先とづめ
 給ふべりめりされどいでやおうき玉も物の
 おりきも入りとそあぐれなるめあ給こと
 哉ふをらしありまかよよりぬるハ心と

むるたよりもたれ物哉とおるきよおのり心と
 やまてよりめたあへるもろせあしとおるし
 り大方の玉あはくあきよハ心とぬいぬい
 り進ハお女あはくあかろよく望むとあしぬい
 朝野群載遊女記を按るよ河内國江口攝津國
 神崎蟹嶋などの河邊よ門戸を比及る辰娼婦ハ
 扁舟よ争く旅船よ著枕席を薦先款とふ上ハ
 卿相より下黎庶よ及ふまゝ接らさる玉ゆこ
 れを愛してハ妻妾とまるとのちり長保年中
 東三條位者天王寺よ詣てさや給ひし時祿宣大
 相國觀音を寵えしれ長元年中上東門院まゝ御

温又云一コノニシレ男
 ノ甥カフガ某ガ伯父テ
 カトシガ子キミテハキト
 云サカノキミ子夫猫ヲ
 ケルニヤト同ハ伯父カ外
 入カシ云ミニエタリ
 板橋雜記ニ妓家僕
 婢称之曰娘外人呼
 之曰小娘假母称之
 曰娘兒有客称客
 曰姐夫客称假母曰
 外浦女

リへるハこの長者名も普賢とリひしあるべし
 磯の禰師ヲ召つりひし女をさいちりその阿多
 とリつりめと姉き共形か東鏡建久四年里見
 冠者義成を遊女別當とあり及て有るハ課
 役なにもかきまゝ飲めと平民は涙出ハさる事
 になりしとの故和名抄も乞盜類も収免
 り昔遊女カ許ニ人ノカヨヘルサマ其家ノ廣工
 ンノ前マテ馬ニノリテ来テムチニテスダレヲ
 アゲテ内ニ入女ニ逢フ曾我モノ語ナドニ見エ
 タル趣ナリ又ナジミタル遊女ハ我家へモツレ

行タリ一兩日モ止マルヲアルニヤユキハ送迎
 ハ馬ニ乗ス虎カ曾我ニ来ルヲナド見エタルニ
 十然リ又遊宴ニ招カルレバ何クヘモ行シ之富
 士野ノカリヤニテテゴシノ少将ハサエモンノ
 セウガ君キセ川ノカメヅルハワウトウナイガ
 君トナレリ後世もよ記遊女ハ人を採て逢
 ことよや猿源氏冊子もたうれとと居るかえ
 けの遊女おれを大名うけけより外へハ出せ云
 と五條にぐりれそと院なる遊女の家を過る如
 よらいぐわうをえたるさめ堂く外の内ゆく

ん十人ぐらうり立出くわあやく情あくもすの
あこり哉とあくせあふぞやといひて後よきり
り流くさく起へも哉とさのみよりり云くさて阿
るーハあろろぎの盃を急くしりあや字博高屋
とと何きさく一先されく誰おもは心ざし者う
へさく流へとヤらればうつめさやだあくと
けくか起とれと見思くさうづき哉さくられむ
けんぐわもてそ者けるりいぐを時の真を環
めつうし此杯さふろぬや堂えさう阿げと次
才よめらうしられむのこり此君堂もあれをさ

てあふろくやぬー此りぬぐさうふ今より後の
きてさうつきさく起てもそむあくさく流く
哉たちー遊君と名あのかうりりてをぬれもあ
り云くうつめさやまをふこととの外のおる酒小
くたちを哉志起く誰いとぬやて人こそて寄へ
くそりうりられ云くりいぐをたそられ時よろ
つめさやとのくやどく尋く来りしりハ云く
宝所家のと御の字子けりりやに神ハ座家の
くはくかへる事後も所定く遊女宿知へ来るハ
後よ所夢とそ以て遊女者ふ景物後源氏冊子ニ遊女ノリモノニリ
云是く
幣物種よ大りいせいや者りりそと此女の景の

テトヨリニラミソメタルコライヘリ

のゆるされたる有りる云々孝氏の所耐あるべし
大似城やハその物や乃かくたり古條のりく
きりし書さしとく
此書誠作ありとされたるあり
ぬありと心してとされハ
へぐさし物ハ賤き部類と見六條ハ三節所
小似性ありとされハその格とソソり
元龜の頃ハ武家の嫁迎ふも負木とソソ
そのほく負せとくと藤穂集よとえと全負木ハ
今も田舎少く物負よ用るもの者控女ハとこれ
制外の若あれハ士庶の格をて論をぐり
度長元和寛永ころの古画よ棄物見く
寛文
とらの板本吉原用文書とソソ冊子の繪よヤに
ヤとソソ揚屋の門よ棄物ありをり

人の糸とのみやハ女郎の糸しこと
下り男の背よ負き
吉原徒然草百十五匠菱
所ハ枕ニおくゆり
ぬ天枕ニおくゆり
所ハ枕ニおくゆり
物の内

雍州府志よ傾城所ハ朱雀の西七條の北よあり
初ハ六條室所の西并よ西河院中道寺所よあり
り我寛永年中よ今の処よ移さる方ニ所餘
内よ三條の所ありよより三節所とソソ
りよ壘を塗与溝を堀東一方よ門あり厄物よ
入ハ安よお入るる我許さばあの時肥前島系よ

凶賊塞を構へ湟を深し此処をれよ似たり
く世俗は島系と稱す始ハ六條の外荒津河系の
口并ハ三條四條の樵木町下栗田口北杉板五條
及北野等に遊女町あり近世修系の外ハ皆禁毛
ふ流と見へたり此説はよれを三筋町ハ今の処
は移りその初へはや色道大監ハ西新屋敷と
しつるよし也島系ハ己る口よいひし異名と彼
ゆされを京童ハ十也阿あ今の処は移り
とひひく修系とわしを此京臺の曆四年の刻ふ
ハハ寛永十八年なり色道大監修系の記系ハ

原三筋者ハ豊臣公といひしその許命を移る
天正十七年洛陽万里小路は遊里を建そのり
乃の左右並木の柳生つぎきたまは俗ハ柳のる
場といひり自地時法方ハ散在しとる遊女を其
とふ此ハ集りしとあむる里小路通二條押小路
上中下三町名て柳町といふ志りしより十三
年の後慶長七年壬寅ハ柳町を室町の六條へ移
さる今の新町五條下ル処是と三筋町といふ方
新町ととるハ阿多ハ四十年寛永十八年ハあ
六條より今の新屋敷ハ遷さる一月十軒ハ原三

享保三年

翁仲^木浪^新所^所
波木^幸荷^奢リ^起
過^追放^{サレ}其^子治^助
鳴^原三^来リ^シ廊^ノモ
共^カナ^サケ^テ桂^梗ヤ^ト
云^ルツ^ツレ^株ヲ^奥セ^セ
テ^渡セ^ラハ^ジム^日ヲ^連テ
敏^昌レ^廊ニ^名ヲ^傳
レ^上林^一文^字ヤ^ナド^皆
表^果テ^絶ム^ルニ^キヤ
ウ^ヤリ^シ榮^テ治^助
吞^鯨寛^延始^没レ
卵^吞獅^コレ^ラツ^ク今
ニ^テハ^一廊^コレ^ガ有^ト
ナル^カ如^シ家^内二^百人
ガ^ラシ^ニテ^時ノ^キヌ

郎方歩^ツ林又一^郎ト云^兩人ノ浪人^ケイ^セイ^町
ヲ^頼ヒ^テ閑^祭ス^トイ^ヘル^ハ夕^カヘ^リ林又一^郎
ハ^伏見^ノ閑^祭人^之後^此処^ニ来^リシ^{ナル}ベ^シ三
郎^方歩^ツ子^孫ハ^今浪^系上^ノ町^指梗^ヤコ^レ之^〇
此^ニ通^ス遊^客む^りハ^智籠^ナク^シ凡^歩行^スル^ニ
あり^しと^ぞ古^画を^見テ^も志^スル^後世^人嬌^リ智^籠
籠^ルニ^通ス^トモ^知ル^其家^ノ中^宿堂^ノ音^信の
彼^理と^ある^一目^千軒^ニ云^或者^智籠^ヤリ^シ一^至
り^よひ^ける^が行^けと^いふ^がい^はく^もゆ^く登^り
ト^おら^せと^いう^がお^海セ^らと^いひ^しより^智籠^ヤ

この^我卸^と異^名と^ると^知り^今お^ろセ^ハ駕^ハハ^り
と^びか^が我^廻り^のこ^うと^昇ハ^列ニ^あり^此内^ノ
と^てか^ご自^由を^たり^故浪^系か^ごと^人ノ呼^称り^ル
其^外所^あて^も智^籠人^豆を^別名^所ニ^なお^ろセ^と
い^及り^おろ^セの^名義^いと^おり^一擧^メる^ニ卸^ハ智^籠
菟^ノ系^ハ侈^奢の^到り^あれ^をか^ご昇^セと^ある^事
と^我を^ごり^りて^異名^を呼^しと^の之^字書^ニ舍^車
鮮^馬脱^衣解^甲皆^曰卸^今舟^人出^載亦^曰卸^あと^見
之^を下^スル^事也^唯
是^物の^中ニ^おほ^めり^トり^し故^ニ浪^系

おろしかりとてしるは是又其始め終たり
ありは其のやまに於て其も役もしつるもやあ
らん。響ハ似城屋の異名之箕山亦とも名目の
来由哉志しはとりたり或云系云希方ハ大岡
の馬の口元あれハそれり其之とらよよりと志
りしよ又一説ハ伏見の遊女町十文字形よ
りしよ其もりしり云即ち其馬の口元としよ
と記すは又伏見とよりしひかて廣く其
るべき理もなし信長記ハ織田右馬助としよ
の人は憑賄也再之死中り白に信長御錢云云を

免ふれしるる女の助入畜生と是をいふる也
と一首の形を抄りて送られりたといえ
是は欲心の之めく漢土よはを由る七八の義
たり金銀を儲る哉響ををむるふりりりる名
也

古画ハ花紅系を之は遊山の思多く遊女哉画き
たるあり此齊物語花見の如し又あはれ
て所を遊女ゆき君ありたり人々打
ちし里云く望千句花サカリアナタテウタヒ愛テ舞傾城ツレテキサヤノホ原本洞房語園ハ慶長年中とハ傾城
の町賣とく雇ひ來也バ何方ともきりりれども

元和申子町賣ハお止神社佛堂へ奉儀の事ハさ
セテ敷取それよりこつ希く知悉此うらへ立考
一王好と考しうバ寛永十八年の以り全故あ
く大門より外へおさし京新の湯系ハあうらよ
り町賣しうらガ是も寛永十七年辰秋申町賣作
停止あり同時高賣のゆ昼わうりとふまうて定ふ
むとい及り箕山云酉ノ上刺ヨリ惣門ヲ閉テ客
ノ出入ナシ夕ノ上刺ニ開リ人なれたるハあは
又廓門を閉ても知考の客未出バ即ききての
一十月十新ハ夜うや昔ハちうりしは享保十巳年

元禄十五年 都内四時
遊具ラフツル
△芝見車七月ハ崎原上
モクマケ、踊、クラサレ云
アレバ其コロハシユモク町モ
此ヲマリト見ユ

此新中上は赦免ありく同十一月一日より始る
中迄半^ルが今ハ定りくするあり灯火
夜を欺き白昼の如し又濯場むりハ揚屋町の
真中よてありしは元禄十六年玉屋毎屋とソ
揚屋ニ新の跡を踊場と其角り句は玉屋はあ
らぬ一夜のゆきり踊の日赦ハ七月十五日よ
り八月十五日迄灯籠並作り物むり有て中迄
続らり我宝曆四年森貞を七月廿一日より八月
晦日迄日赦年より極うなし。○箕山云^{五三三}
八天神圍とく皆一日の松料の赦をたつとく名

とせり價敷昔よかこれ等も今以改る事あり三
 ハハ方丈堂天神との事此職之此名目当時改絶
 去とせりども今大坂の方丈とせりるも是とお
 明し心之今大坂は昔此方丈と停心と名により
 此職を方丈とせり宝曆三年八月廿八日ハハ八日と名する延宝の
 以大坂の方丈江戸長崎も價ハおかりりぬと
 の價ととせり
 ど空廓あり上高紀を方丈と号以天神團の事と
 へ其源を礼をば編まらんりりりへま松
 梅麻の三名をいふ方丈と松と天神と梅と
 団を麻とせり昔の價は推して天神と梅と松と

は団を麻とせり小町高し此
 日此心より一代男は新町の夕暮哉りハハ
 のそおを云キニゴ打り起まると博徒の約なりと
 抑亭子云キニゴ打り起まると博徒の約なりと
 此は是と云ふと主なり其徒の祠まかひと
 あり十は女と遊女とをその以りかひと
 へり後よハカル女の打中巧者あり女の一
 も十二ふとハカル女の打中巧者あり女の一
 りくたりと十五女に巧者をいひ名は西
 日け中と十五女に巧者をいひ名は西
 窟赤と十五女に巧者をいひ名は西
 べし是と十五女に巧者をいひ名は西
 及り貞享三年の冊子麻意ハ十六女四の十六
 非あり九と十五女に巧者をいひ名は西
 堂り小名をいひ十五女に巧者をいひ名は西
 叔子おちるるとの之団を分て賣まハあり外

諸藝大平記大夫
 七十六夜天神三十夕春
 八十八夜端女郎アゲア
 行ハカコヒナハ半夜トイ
 十夜端女郎出口茶ヤ
 アソビ北ノ茶ヤモ同前

よ半夜女あり 貞享此画茶子半夜ハ九ぬ志れよ

昼リハ国并夜入チハ十夜午刻リ未刻ニ昼隔子アリ大夫ハ出テ借シテ宿リ夜泊アリアヤヤ軒出口北向ナヤ、合テ

端女ハ假突心ソ小端旅ソソ阿不假の突リ

ある故志リソ小と阿リ北向方貞享三年画冊子

よ北方の横町よ阿ソソソ端のこやのうちよ後

く夏冬形ソよさくちあ哉ソソシキ及迅速を祝

一終ふ云々 一目千軒よ中堂寺村住よ一やを云

所あり北向女ソ始ハ價五分後ハきぬぬソソ一

今ハ揃多よりとち夫天神ハ口の茶屋よあを夜

とあり阿白ハ揚屋バウリよてありソが宝曆の

了海分端女郎口の茶屋に泊るを始リ 昼のそは

りし 爰よてハ花一本三ぬあトと定免ハ揚屋よて

ぬと又国ハ延享まで價十八ぬなりソソ後改めて

花一本きぬをト但一揚屋よても茶屋よてもよ

ふ耐ハ端女節月並くと委くハ一目千軒よソ及

北とも何故よ国ハ端の次となりしうをよ一ハ

見^元以おりふよ價リソ出るよ国の名よ負^元は堂

よやさソは天神も名哉取むソき^元もや古今の法

革この局ハ端女の居る所ニ箕山云局ニかろ

暖簾昔ハ花族乃市家へ中阿け市巾白されを蒙

りてうけよを彼市家より布哉柿染おソソ長さ

日天りぐ三布にぐ縫合の二不し柑子革の露あ、
 りちうりとりへども此故ハ今断絶しと彼作家
 よう吟味もあし似城屋自分のちうりひとく
 是とくみる尚時暖簾の色ハ紺漆を用たれども
 大妻町バウリ今こ柿色を用る古俗を以て
 殊務のする此局の内土間ハ外あしと冬二冬
 裁ちが定まる法用は或ハ三冬は冬すちくも
 あり床相付々もあはる冬すちく竿裁はる衣掛の竿
 としふ子細ハ是之江戸の局ハ口の間も廣く奥
 間も寢所をかゆふ云々

堀江もも乳守遊女町の
 望二后十句似せかき手旗城門とくニ青ウレシカウケ

廓中昔ヤウス東海道
 名所記サチ本町ニ入テミ
 レバカウシ内六金原ハシラ
 カレタガホニニ具キカミ
 向ヒタゴ金ギンキヤル
 トリハ池田炭ラ富士炭ニ
 ミ時ハ加羅極花持世ナ
 トリカラカ打レメリタル
 ニ三節ノ音折ミヒキタヤス
 アニカレシカラズ又ハレ
 傾城ハ蜂ノ巣ノ如クニメク
 ニナイヤキ局ヒトツカヘテ
 門ノハナニ華ニトゲタル
 青ノウレシカケナラ火バ
 又ハ自ノウレタル櫓ニゲニ火
 ライケヤアケノカタクレケ
 ナル古キヤルニタゴツ取ツテ
 前ニオキツクシトシテ居ル
 モアリ門へ走り出テ男キレ
 ニ行アヒ狗コロノルヤウ
 ニ又レフト引ト、ルニアリ
 其サマ今ニクラレハ實朴之
 後局ノ道真ハ主人ヨリワ
 タスヨシ其山イハリ

耳をぬる子ハ他如おちぬ玉
 多き焼一車諸艶大隈は十年とヤハ水揚より
 定めぬ新めハ婦女より引まハされ百のあてり
 ひハ親方より先方丈ハち一先二年の間毎日伽
 羅ニ焼書五枚云々色ニ緑女身あへり苦
 をしひく近年女子は赤くするも亦も人のきく
 志出る名の亦我焼紙をたしは云々是故ハ箕山
 も似城小令限をきけしは伽羅を猶だしはく
 叶りぬ物れはハあよりへるもほしう新事なる
 よこれと猶も人希くはしはれあしきあがゆ

云々

此はよれハ便おわくく目よくくざる物志
 ば此便にくハ衣被をきくくかく海ききく
 の利りんお之衣被調度ハ似城自分よくく
 る定てもおのひの役ハ似羅ハウリ人形
 もおめりくく似およふ法廊昔よりり事
 一七サ斗他よくえく面ハお持し侍るとり
 も昔よりりりりりりりりりりりりりり
 故ニ吉原讚嘲記ナドニハ富ル人ヲサシテ伽羅
 多キ人トイヘリコレハ金銀ヲイヘリ金銀トハ
 イヤシケレバ隠語ニ伽羅トイヒシハ
 江戸町西

村居助ハ抱への香久山ウリとよ何とあり田舎
 人のまのしりて来り伽羅の割ホをニお火より田舎
 のおの間のしりたる我あとも女郎の移る古何ヨ
 言歳且帳ニ國厚ウチ代ノツヤアリ伽羅六年露
 キ頃マデモ俗語ニツヤフトイフヲ伽羅
 言ナドイヘリ通りモノヨキ男ト言フヲ伽羅
 金省枚伽羅ノ男ト云昔ノ浮世紙ニ伽羅女ト
 云題号ナドモアリ月意ナリ然ラハ伽羅ノ下駄
 ト云モ唯ヨキ下駄ヲ称ハタルナリ又江戸鹿子
 見エタル伽羅休慶伽羅小左エツナド云モヨ
 キタイコ持シア望度子ウラ加香野中オホツナオナキナシトモヨ
 夕名ナルベシ望度子ウラ加香野中オホツナオナキナシトモヨ
 一代男六女郎の年終をくく如空色のそご葉中
 一ハ樺ぢのほよほれ梅を散らし上ハとん
 ころよ五色のきりり羽振をく板をぬき玉起り

布肩カケテ古
 カ子カラ唇カチカ
 フ文ノ上音キヤ
 ウノ下音カヒヤ
 ヨヨリカガロノ
 タキカラカラ

敵と云ふよりさ程其是遊女ありて是のこほり
後志ぬ若衆女郎の物を知る方板新町富士屋と
いふ家より千し助と云ふ者此女ハ袖を葎系町の局
より阿りしおの川より髪短く切るありし
より寛文九己酉年より本宅の局より阿りし
ゆねを去り髪をすねあげよひは後彼の去る
ちりく切らし御帯をりりし後阿り懐中に鼻紙
たぐくのくろよ若衆をよそをひりし出る志る
しに暖簾よりくよとて廊を赤村又次郎より
し銭物と暖簾より定紋を付し甘地よ麻の角と

柿ありて深のくは是若衆女郎の淫筋あり見る人
めりしし是のひく門前より市を去り故より
しに一人より出来る布とよ今ハあめくになり
堺奈良伏見の言をむらまはり是元及よまける
者をおひき入むの謂ありん軟されどもよ記女
よば若衆女にハ志りしそれよ元合より白
をて^立まると又由大坂の若衆女ハ外面より
それと志りしむる若く暖簾よりありし大き
る紋と深入るといなり洛陽集志簾阿ハ出れる
このや柿暖簾 有知 〇まいといふ詞を釋より板

粹の上畧とあむぐまちハ松の蔭繁一中節百屋
助六乃新そもお阿まーが氏神ハさうしたぐこ
ちふ神さぬぞ云ソノカミハ言ハモツカシシ詞トミエテ吉原大枕ニヤカマキモノウケテ大ヨセトアリ旧説は月の音はくかく異名
ある客を此乃よ動くはして物志うとる面うけ
をう門を望も粹よ及さるおよ水の月よたとい
月とソくうとぬうを程守へうくくもと呆癡な
との訛言まやうくりふも亦ぐまちぬるれ口ぬ
知る志ゆうとさく述のさるはたをソふことハ
皆むうー此をゆう詞あり字良美のまけ草子長
執着のうはせんぬめゆゆ述あをへやふふへ皆

人云く鬢草 寛永尚世むてとく遊女ぬえり男音
吟我集序慶安今ぬえり新天下よちゆると何ッ
時九ツの古登よなむ者なる其外よも大まらぬ
めり乃中ぬとソつるこまうり元禄の江岸程
次希三といふ三弦を古き唱よと好く尋ねさ
ぐうく三弦のぬを將さう人よゆれぬぬめり哉
十七段は引まけさまとぞぬえりといふ曲節あ
りといふ也今も浄るり能者の文章縁徳をつく松
さる哉ぬえるとソ滑字の意なるづしとゆ
ハ似せその徳なきその似城よ馴染めり此男つ

け買はし〜常よ女とむらひ向ひ居りれを女い
と志中〜なり金もいと〜せむあ〜れうひそ
といひけしハおひよハ悪あるをもりんさく
出おひあ〜うさハさの阿〜はあまといひく格
子此内よとれを俗のこのう〜しの外よハ人の
ら〜越もあ〜ぐのさむれハ云〜竹斎物語踊の
小前心を〜此内裡を〜や志ん〜志船〜
かり〜し〜
正保四年
梅草ニ我モ昔ハ後ノウキ世ワザレト迷ミレフ後悔
マダ〜色江戸小細町あるマダ〜れ橋のとハ見
聞集そ〜ろ物傳よ出〜
度長中の異名形り承

江戸土産出誰カ百年ヲ送ラシテノワザクレ寸先ハ〜云
代花よち〜口〜ぬ算用す〜
りあ〜後よもあ〜見〜
北の〜れハ是の義なる〜又云好事の意あり
〜
あ〜物のち〜れあ〜りふ〜
れ〜
可笑キ云〜大幣〜
の宿さめ〜人〜
記三卷似城ハ油と〜
花車めり〜

やうなり風の糸柳をゆく志やうくさい
同徳とまゆ箕山云志やうつくハ徳をよされ
我交へいさむる見をいふ是恋の一うり
本洞房語園傾城の正ハ余情を好むとの
中うらさいとりふ此起りハ越前
まてハ遊女の正哉志やうとりふとあり
しやらくとりふいと洒落の字より
ぬくは移りたるこのさりるハ
三上人ある人よ返事の中身の毛も
あどよ思なきみく徳のさふ思名徳ハむは本

無名抄評三十九処下アリ

定ぬく云々太平記考証村松三郎義光東海乃名玉記徳系の処志とらぬる

ちふ教をうさひのさりり行のさハのさの義の
さくぬをいふ是こちうハありの俗言ニ徳字の
定と見たり○方鼓とち古くハ方鼓流とリ
了意ハ記其義ハ袷袖海は能のち鼓およあ
かとはよへへちまを心よくのやく思ハ大層の音よ入
は拍子たつちハちと云未社をいふハ大志ん
のそばよ有る○私うつとりふハ江戸の詞と
らゆ音系統然草買手ら如命よふ備されぬ
起ま定りこれに徳ぬくさうらうら方徳な

大空なり其おこころはなかく此里よりよりい
がく金法きぬ〜そりなる語母堂らうつとを
身上と果きすの金尽とりふを証撞カキはるる例
のなきくはや又思ふは是も隨處の訛音はく証
れ今に戸ふくそらく若とりふを系蹤波ふ
てハハ海ありとりふ堂らくの踏踏なり
一日買袿艶大鑑は誠後の此六とりふ男かうそ
免よもとりぬへなるこ堂嬉ひ之六條の一日買
と中も此人始めての却のありませし堂りやと
り〜り一日買堂を大門をらうつとりふ類うせよ
りふ紀文ハ豪富ありて吉原無任舞堂々大門を志

めさそ〜事あるありて堂を六条一日買ハ上り
たのむり〜断ありて事知なり〜紀文りてハ
究めく虚況なりカキ銭ありて教ある遊女子通ふ客
の教をらるるなり〜はそれをやめく大門を閉る
てぬる〜きりハむり〜より堂とちれどりと
不審イブシ〇揚銭多く負く返るての形くぬとは桶ふ
せとりふ王法とりり似や物後よ男女うあつ
き合く走くむとをら銭長ばつら〜男銭はつけ
と〜け志け志を女をバきバうりて〜よ志免
く志づりりれをと云く此らハ桶ふを以てハ

世に紀文ヲ其世ニ世ニ富
有トナリテアタノ金銀ヲ
ツルビテ終レリト云ハル
モ非ナリ
延宝八年申、三月廿九日
長持町夜小政の屋場
長五十万横十一万をい
控本町を三十五丈甫
所名をよまふ(甫信
所名をいふ)右三人、
あるり此何れも三ふ
外もやりのかハ下場ニめ
材木を紀伴國や文ちろ、
お後ハハ方々市地り小
屋場也

未あらしし、や寛永十九年吾孀物傳やうれふ
か、年のある所とそくせん不後ハうあふは桶
あやと志進了意り浮世物傳よその外あき浅よ
法まりて桶ふせとなり云く江戸土産咄ツヒニ
ハ吉原ニテ桶ガセニナリヤウク友立ノカゲニ
テノガレカヘリ箕山云拳後を負たる者をせし
つゝ入湯桶を打りふせ銀をうけあはさるるこ
昔ハたまさうふりうはとも有りや志らん今ハ
名目のこ有るかやうの仕業ハな一高財ハ銀を
肩たる者の思ひく末々銭を付せぶとぶめくろ
へさぬ廓法こり治寛文よハ。朝迄夜の未明よ
来く廊門の冥く銭持くる銭りふ英一蝶り画
よ修系出口の知客ハ門の外よ居り内の脇うけ
よ遊女あまう所り閑とる門の扉の下北透百よ
り杯を外よ居る客よさけ知内よハ今開くむと
く建りてらるるその有夜のさぬまで提灯のそり
此界知込あるべし古記茶付くはくこそ
みよ手まつさへきるかあち口おまゝ壺入とい
ふハ箕山云拳屋ふく遊宴やけ似城の家をの替
へりく女くと興さるこ此名目酒屋よりおさる

明良洪範ニ富者ヤタ有シ
紀伴國ヤ文左ノ上野中堂
亦普請ウケ原ニテ數十金
ヲマウケ奢甚シキガ元禄十
三年夏評定所ハ出テ只今
ハ市用ノ者ニシテ病氣養生
トシテ入湯はる屋敷申ケル
伊豆守大ニ憑テ町人ハ分トキ
上ラ控シぬチ湯治子カヒ
ナド、我ホカ組チカカ家未共
迄頼メ頼メキコシ然ルニ
今歴々公用、評定席ハ
頼出ル大ニ頼リ者ナリト
テ評定申ツケラレキアリ貧利
深キ者故後年終ニ金銀ヲ
失ヒ一日モ送り難ルヤリト
リテ徳道、鉢チテ人ニシテナリト云

諸藝太平記元禄
大夫三十八人引舟月
前天神九十二人
五十二人端女即
打上九八百人揚
廿五羽茶ヤ四十五羽

らぬまハ物のうずあ〜以俳諧三足猿宝永元年撰女

房子附ざしすまハおり〜う里智かの隙さハさび

とゆ系一月八千人九丈三十八人五十二百人計

○傀儡石垣町諸國中遊女目録の祇園町後木坂

柳町茶屋町大坂新町阿波の方屋

多町誠後町揚屋夕暮阿波の方屋

山本与次多清椀久豆舟新町遊女の数

大坂中茶屋地獄掠をの新蓮葉電拂

比立尼舟さり立君立君立君

豆と阿るどく偶人なる然るよ遊女と同類のをも

めとまの何の故とも辨〜る若者なれよやあ

しぬとのお〜哉説りゆは旅館のお女とバかり心

ゆハ詞茶集子別款あつまへゆりりり人の

やとりりゆりるが阿りつきにさちりるよよ

める傀儡靡ちり那くもりさの列のをトひりつ

りハ人をおらう〜〜兄翁なと阿まをあや遊女

とちいさらりかをれ共旅店の女と志りりふハ

後子唯〜〜いふことちりと人形を舞〜又ハ放

下りどするとの〜妻むす先堂りの色と賣との

以てハ傀儡とを呼ぶ〜之朝野群載第三傀儡子

記ありそ又長りれハ要と撮ていふ所一傀儡子
者無定居無當家逐水草以移徙類夷狄之俗男以
狩獵為事或弄双劍七丸或舞木人云々女施朱傳
粉唱歌淫樂以求妖媚父母夫知不誠逢行人旅客
不嫌一宵之佳會云々皆非士民自浪浪上云々東
國美濃參川遠江等黨為豪貴山陽播州山陰馬州
次之西海黨為下其名愧則小三日百三千載万載
小君孫君等也云々是船を家堂一々遊女のどく
定居なり浪のうへよ生涯を送るもの委ハ愧
俱考よ祀一それをもくよ畧を遊女もその始ハ

かゝる類なるべし都ふくもそのりて建武元年
二條河魚落書たそりれ時よなりぬまふり北
くありく色好いいくそをくそや教り知内裏お
りいと名付とる人の妻鞠マドモのりりれ女ハよその
ま類同し心地あり

日本國中遊女町箕山大鑑云才一京西形屋表号
鴻系二山城伏見夷町三月処柳町四近江大津馬
場町五駿河府中嶋六武藏江戸三谷七越前敦賀
六軒町八同三国松下九大和奈良鳴川木辻十月
小綱新屋表十一和泉堺北高洲町十二同南津守

十三摂津大坂 瓢箪町 十四月兵庫 磯町 十五佐渡
鯨川山崎町 十六石見 塩泉津 稻荷町 十七播磨室
小野町 十八備後鞆 有磯町 十九安藝 廣嶋 多々太海
廿同宮島 新町 廿一長門 下関 縮荷町 廿二筑前 博
多 柳町 廿三肥前 長崎 丸山町 寄合町 廿四肥前 樺
島 廿五薩摩 麓町 田町 以上廿五箇処 原本洞房語
園は載る
校正志記を右の如く遊女名寄位附等其磧り
傾城色三條は如く
一代女云々 好色旅日記 貞享四年板 祇園町 繩子 打掛
よきて色茶屋あり 女の乳つく 孫ひ妍と云々
さて二女ツよ 考らねども 今迄度知るとりもあし

茶屋の女のおちと 姉けしるが おとれく 酒の
とて 堂りくハ ちよつと 展風も 引あつて 一代女
貞享 祇園町 八坂ハ 花代ニ ぬせりく 篇ごに
声りけく よく 志やう おせぬと けりよー なや
二人あるよ 子よ ぬあ人 産まはく よう ちや 前後
の 園云々 轡口を ちよ 元禄十 祇園や ぶの 下れ
色茶屋よ さはと けりよ ちや けりよ けりよ
の ちよ ちよ 云々 元禄 吾我物 傳祇園町 井筒屋 小
く 舞子 けりよ 人 けりよ ちよ けりよ 云々 貞享よ 一
祇園 けりよ 又 けりよ 〇 一代男 一 傳 けりよ けりよ けりよ

里茶屋り三河屋葛屋りと披く細乃の萩垣と
奥よ入道ハ梅子堂北原札床よハ誰ハ引きて
かしの木のさるよ一筋きねく結ふともねくろ
る米此烟草蓋よ炭國の埋火絶き為ハ何となく
お志ありく心地よろしく艶道通鑑年板五清の
ちよつ々きく北斗堂灵山寺法観寺云々いり
り淫婦屠兒の極存と成搔立し法焼ハ夜店之行
灯よりり焼志めし香烟ハ樺燒のふりびよ夏
を嵐溜が簾をろく里く阿の笠の後甲戌孤の暖
簾ハ瓦子動く家名そ人を招く云々藤の下北二

ハらりり此ぞめね〇一代母石垣町茶屋とい
へと此知よハ一軒よ七八人住くも有く衣敷の
仕おしよた人お手に分里の事も噂おほく云こ
武野燭籠よ石かけ茶屋河系哉兄おろしげけ造
り天警戒を以て包み天井とは水晶の合天井に
て水とてて令魚と改ち障子ハ合天井に
以て言ハ見へて内ハ足ぬやよかまへ取張
令以背の枕興放持ちりしり天和年申
禁止きく於と足く祇園町ハ此時あるし
西鶴大鑑六祇園石垣上ハ新穴奥ハ板清水の茶
屋とつ々いり一代女町の髪ゆひくき男
細奥上ハ刺の茶屋あそひの諸をぬくてハ知り

又此、新地一居行子
 後篇安永五年刻思モ
 七八歳、コロ祇園新地キ
 マタ建ッロハテソコカシコ州
 生シダリテト家ト入シ
 リマバラナリシテ覺持ル
 迎今ハ大ヤシキ、志及四六
 十兩二十兩、價ト九北野
 新地モ五十年ハリ、カカ
 ハ三番町五、ハノ町ト段、開
 ケシ昌ナリシガ移リカハ
 此近年ハサヒシク成タリカ
 レ景清ナド、武士ノ通ヒト
 キリユ茶屋モ今ハ二軒
 レシ、残リ田島野原
 ナリシ七茶新地ハ五茶ヨ
 リ建ッキ甚ニキニ茶
 新地モ川ハタ、茶ヤハガシ
 若狭街道、茶店、株

云々このまつありとりふぬハ程そのかこを
 やまらるぬなり似我摺物傳、寛永ころの冊子之
 を補い目錄ハ書付と加へさし、今の如のち申
 弦とさしとハ寛文ころなるし、今の如のち申
 り物云々志をうけ所よとつあり所と云々
 〇為集移居の茶屋風流旅日記後森と移居
 明神此ありりの茶屋簾の隙よりまきく銭これ
 をさふせと云、何ふ志やるとりハ此札のりり賃
 又下せと云、何ふ志やるとりハ此札のりり賃
 亭主よりやのま丹茶能元禄十四移居の條迄
 年出遣宮より此り、多居の番ハ新我あへ

ソレヨリ、酒ニウツリ色
 ウツリコリ、シタル処ナリカ
 段トトシ昌シテカニ馬キ
 野中ニテアリシ非ハ屋今ハ
 新地ト町ツキニル今出
 川新地モ、前後ノヨ
 ヲリ建ッガ今ハ、ウツ
 タリ云々

為哉うけとつら、此女男哉とて嵐あき、何や
 や物のもざりとと、バイヤ、阿志ハ此如の茶
 立女のを究ハ奥よそのあひ花代り月海と皆め
 ハ外よおのることり、この月分とハいり、形をと
 を且形流ハいりい、ぐとちあふ月ハき、飯かハ文
 知とりふぬ、ひ詞を伝存ないり、月ハ、おとつり
 ふり哉、そりか、とハそのまか、あつべしか、の如
 とりふハ、遣女年浪あけ、くし程我、移居にその主
 より、そりあ、く、朝夕哉、りふ、又か、ざと、
 ね、とりふ、時ハ、唯色、町の事なり、
 荷の色茶屋ハ、坂より、も、さ、る、う、に、さ、ら、と、有、見
 又元禄の末、此茶子之、箕山大鑑ハ、伏見の、強本町

一旅日記 誰神海 薩木町ハササが故よち
系乃ながれと海で鄙び大佛耳塚の所より
卸も^{オホセ}有りて爰よりことと女郎押おぐく禿とつ
出る系の国よりハヤ^ハ以より旅日記 薩木町麻
お^ハり^ハす^ハ次ハ端を^ハり^ハ夜^ハも^ハ誰波^ハか^ハ
り^ハく^ハ燈^ハと^ハ不^ハさ^ハぬ^ハ闇^ハぬ^ハ面^ハお^ハお^ハぐ^ハと^ハた^ハと^ハい
ふ^ハ時^ハ硫^ハ黄^ハを^ハづ^ハつ^ハと^ハか^ハく^ハあ^ハく^ハ木^ハ地^ハと^ハハ^ハ見^ハと^ハけ
ぬ^ハ稻^ハ妻^ハさ^ハあ^ハた^ハし^ハよ^ハお^ハ自^ハを^ハめ^ハそ^ハと^ハな^ハひ^ハを^ハあ^ハる
管^ハと^ハあ^ハく^ハよ^ハら^ハる^ハぞ^ハめ^ハた^ハ毎^ハ日^ハを^ハり^ハく^ハ屋^ハや^ハの^ハお
子^ハ云^ハく^ハ麻^ハ慈^ハも^ハ梅^ハ子^ハより^ハま^ハね^ハく^ハ燈^ハと^ハり^ハど^ハれ^ハ申^ハ敷

ハ十といひくむとつとぬ云とつりされを
玄峯集よ伏見薩木町炬松ふつと聖辺紗もりふ
爰のとの古風形づし 嵐を新焼下来る夜送る
扱五月あけく此く家よあ^ハり^ハや^ハ夏^ハ此^ハ月^ハ北^ハ窓
瑣談ニ伏見薩木町ハ安永の末ツ以きてハい
ぶ救家強り存て捕^ハり^ハれ^ハども^ハ妓^ハ女^ハも^ハ數^ハ十^ハ人^ハ者
一^ハ大^ハ石^ハ内^ハ務^ハ助^ハ山^ハ科^ハと^ハま^ハり^ハ一^ハ以^ハお^ハく^ハ新^ハ屋^ハひ^ハ一^ハ毎
屋^ハ清^ハち^ハま^ハつ^ハと^ハり^ハつ^ハる^ハハ^ハ薩^ハ木^ハ町^ハ守^ハ一^ハの^ハ大^ハ家^ハよ^ハて
大^ハ石^ハの^ハ時^ハの^ハ後^ハよ^ハて^ハ清^ハち^ハま^ハつ^ハ七^ハ十^ハ余^ハの^ハ老^ハ人^ハあ^ハり
一^ハその^ハ母^ハ乃^ハあ^ハり^ハし^ハ時^ハの^ハあ^ハり^ハて^ハ大^ハ石^ハを^ハま^ハり^ハく

是れも又ちども多く此家よりお持ちせり其の義
士ども大石と共にあり抱ひし人のあも多く
跡より大石の契りし奴哉夕帯といひしう大石
より贈りし三條中へ祝ありともあり云々其後清
方へつ死矣也薩本所も年々衰へ毎屋の櫓も
跡より毀ち賣物よハ薩本所も跡より棄とあれり
凡そ内より移り置せる致さるよ余りあり其後寛
政年間より至り誠よりやしき事梅終より二三家能
入りや建立せしかと昔の彼よりあはれん云り
○紫尾所箕山云近江小方津遊廓と世々紫尾所

といひあはれり傳れとも馬場所之紫尾ハ遊廓
の外下此一所といふ似城廓中の外へ出て天神
廿六日小天神廿一日同十六日亥大豆十日夜
ハ毎之夜もせのこ登らせあり似城先年ハ八所
の強盗ともありぬいつよりり別禁之今ハさひ
りたり坊のあかり一も所ハ似伏見よりあまき
りた也とかくおとろへされハソつとと日記り
と一一代男紫や町もやこよ近き女々の礼俗も
りりり超局よおしふ所の言くありくも大豆よ
せりりくる物も志とてに帯・ゆり・化粧

も同くつると小志きよよしねせよ三線みせんあき
り法はをあつくくくふ立たよるをあハるくく九くち
亦も乃のりこ浦うら辺へのまくしをあふとり云ふ此知ちを
いさりひの物あくく今志ちらはのより合才さいと持
くる若わの歌ゆく知ちはあくは永なが代しろ為なるた津つの事
哉やいふ知ち近ちか年ねん間ま屋や所ところ老らうのとく屋造ぞうく若より
りり二に階かいは探音おんやさく紫屋むら所ところ白しろ女むすめよひ
よ世客きやくの遊興きうを取りぎくもたしハ此事こと延えん宝ほう中ちゆうは
ひひりり又また貞ちん享きやうとり也なり丹に前ぜん能のうは紫や所格かく子こ女むすめく壳
亦また興きうとりとり也なりあり揚やう屋むら哉や中ちゆう宿しゆくともりいふ婦女むすめハ小家けよ若の也
ハ此事延宝中ハ止とりとい

んんくくるる局きうとりふふと者
大板新町おほいたか遷うつ標しるしは高津たかの花巷ぢやうハむりり天正慶長
の以より諸知ちは遊女むすめ哉やくくハ後世ごせいのとの者ハ
哉や寛かん永えい年ねん中ちゆう今いまの出地でをりく金邊へん徳とく所ところの遊女むすめと
一い所ところは集め一廓くわくの内は水をあくくハとりりを以水
村むら又また水みづ師しとりく浪人なみのり者ものは廓の庄屋や年ねん考かうを後
おお付つ永ながく似城じやう町ちゆうと成新しんは町と似りりハとりり世
人ひと新しん町ちゆうとよびく無な名なとき高たか知ちふくハ中とりふ
瓢ひょう箆へい町ちゆう但たに南なんに日前ぜん乃の頓とん協ぎやうはとちやくたん町とりふ
者もの其その知ちの一町ちゆう元げん和わの以此こ知ちハ後をり也なり古こ光みつ

系とりしる如ありそれより移在中に江戸が長
一系お遊をりれし^者如との新茶橋町新橋町
居との如あつちるなりなり
共ニ北廻 生西と九軒町南廻 揚屋町之 揚屋此
り一代男六京ノ女郎ニ江戸ノハリヲモタセ大
叔ノアケヤデアハバ此上何カアルベキトイヘ
レバ此諺古キト見エタリ又コノ処ニ大夫出
キシハ栄花咄ニ一トセ大坂ノ新町ニ木村屋ト
イヘルヨリ御大夫ヲ仕出し其名ヲ越中トアラ
タメ難波ニ五三ハメヅラシ都ノ如ク引舟ツケ
テ堀江ノ水揚ヨリ一日モ隙ナクテ芦ノ一ヨノ

情ヲ争ヒ久シク此里メイリケルガ人ハ移リ気
ニシテ云々女郎一人作りナシ親カタヨリハヤ
リ衣裳ノ仕出し素豆ニ雪踏ノ音タカク禿モハ
十紙メニ立ホド入テ云々是扇ヤガ此ニ来ラ又
已前ナルベシ生巾扇を^何々々情といひハ京
於此系より寛文十二年大坂ヲ移る是林又一希
り末こ^り林又一希ハ^り伏見遊廓の開茶の者な
り^り後此系よ^りの^り大坂ヲ移る^りなり
世よ^り夕暮ハ此家の名妓より系より此
時下りしなり侍ち^りと^りのハ^りなり
き^りと^りの^り扇^りの^り音^りの^りなり

つる音曲の傳りよの有此類局の内よ阿波の地
尽とりしるを由縁ある事之を以て大板阿波屋某
そく大分限の者あり昔因屋表者より言はく此
夕霧にあしき深りしり夕霧ハ延宝六年正月
六日死をせしりあき芝居の立役板田屋十布同
年二月三日より夕霧名跡正月と云外野より
屋澤方より十布なりと云云
これよよれ大
阿波屋十布を夕
霧死せざる内の狂言の中なりと云ふはあ
つりしり耳塵集考より名跡正月しりふが夕
霧此狂言當時のち夫二人禿ハ法也これども
引舟世帯ハ此夕霧は始る云云
其始る事ハ夕霧
を中より自ら

よ国を一人揚る如くしりしりハ非又其後ノ
なり是系原より云きしりしりハ
トニヤ伽羅女冊子宝永新町九町の玉我りしり
昔阿波の大志ん木屋のみを一城馳走の爲に態
聖浦より鯨の生捕を取らる事ハ昔より言はく阿
波の大志と名をあげしりしりハ穿警云々ハたを
いもなる虚人此入目すかなり其其如きの爲よ
しりしり其後小波の天五光ハ不男此阿波り言
をせ丸屋乃真あよ小判をかりしりしりハ城指云々を
後ハ長谷川等雲番ハさし其言此手筋たのむよ
大分の物入ありしりハ花車しりしりハ其の事

ぬを上げられども是又手書しそのあとへ山本
以多唐吾妻よりひの久曾敷のちい里七う船と
禿りまささこ不便は思ひ也揚屋中へ屋形袋とく
紋衾の蚊帳を四方に張り記令浪の言志也ぬ事
も序やうに名ハ祭を以唯りさむくても椀久り
松山は六年の歳を歩き外づく海きーこと堆^{ツカ}
人も志出りとり及び濤標は寛文中依渡修節
者方の抱昔妻とりつる大夫は振お山本村の板
上り次ちるとりつる方唐人劉傑なるこれ世
は山壽よ次多情とりひうへうりそ以の小書よ

あづ原徳おを山崎よ次多情云こそ例とてけ
おせ三百あると観ひありそ以女方の身の代三
百あるとりつるハ知つる記こと少く今りふ千
金の幅よりもまささ毎どかりし又云松山はな
みー椀久と元日金年越とりつる淨りよ他り
とく銭これに節分の物外よき歩豆板を乃く揚
屋ざーきほく蔚とら事あり是ハ元禄中ち板玉
屋某としひ一人越後町茨木屋長方う方少く致
されとら事之又此以者徳人の果はく致契よ十
徳を忌一峠杖よ瓢箪をわう付門よ立

被久墓六太板八町寺
 町実相寺三在京連之
 墓トシヤリ没年延
 宝年中又ハウシカシ
 宇永コト者テ佛説ヲ
 陪談シテ河原ニ立市
 中ヲアリキシナリ

諸藝大平記大夫判
 六十三夜天神三ノノ
 五十七夜小天神世三
 半夜三ノ五ノ端女郎
 十二夜各ノ中ヲ揚ヤ
 取アリ局アリハ小天神
 十五夜或ハ十夜ニ入
 切テ六夜分ノヤト限キ
 也
 内天非ハ十八
 宝永七年四月廿六日
 △ミホクレ女郎ヤお六
 大夫四十三人各ニ舟
 小天非百七十四人各
 ナコ九十九人各ノ子
 四十八人ケイコノ名
 總計五百六十八人

口哉いびて物哉也一孤堂ありくこりひ小源者
 ありしそれと二品とつあ一く他りく新ハ他者
 の祭明ことりり横久一世物語とソふそのあ
 又江戸より紀文にも此豆中記の事ありといへ
 り疑ふ所一横久の浄まりハ其屋某ノ事哉也
 以りハ伽羅女ノ大坂中色茶屋と記をり身屋町
 方方ハ橋六新町乃松堀川裏町日土檀町南堀江
 小堀江登横筋うい新地乃根崎蜷川中町よと町
 安治川新河あむうひの外芦乃橋の色やて味
 ぞ一はいり新白茶屋も二人三人五人ありし

審哉りともぬ女となし 此冊子宝永七 宝曆の
 風来ガ弟子ノ廻波津ノ今哉春也も堅クあり松
 梅の全盛ハ新町ノ色考哉ありハ一人藝子乃
 今相考りるハ南北ノ風情とたつりハ新々
 そぞろに虫の内恋の板町登つめ隠をとおるい
 ろは茶やちりぬる客と釣よる月りとの境町
 ころの月りとたまぬ味の安治川ノ深くをあり
 一堀江大前地次身ノ言津新地より我を忘去く
 神明お何れと廢まのど町でも柳山強と身ハ世
 あり何と志やせん一室ハ六七里らんを人

漢エニモ後世娼妓天下ニ滿
 ツ南京、教坊官、ノ稅ヲ收
 ムルヲ脂粉錢ト云郡縣隸
 スル者ヲ樂戶ト云テ使令
 ニ隨フ唐宋ノ代官はフモテ
 酒宴ノ位トス明ノ代ニナリテモ
 然アリシが宣徳ノ初ニ至リテ
 始テコレヲ禁セラレテ公庭ニ
 出ルヲ絶タリトイハレマス
 里閭ニ充ルルヲ猶コレオ
 ホヤケノ妓女ナリ昔管子
 齊國ヲ治ルニ女閭七百ヲ作
 其夜合ノ法ヲ徵テ軍國
 助トスコレ是法ヲ作備
 官ニ隸セズ家居シテ交
 ヲ賣ル者主妓ト云俗ニ私
 窠子トイフコレ又數フル
 ニ勝エト云リ

らんや我才の雛妓新あしきさいぬ尼寺真由山
 浮名とりぶる編笠茶や宿ま留進き臍ち茶屋六
 十口又あり合町ぞうゆじ福ぞんし裏くよす
 む牧登の紫呂そくぞや塚まちりをより云し

隠まきく色を鬻くとの哉地獄といふハ暗物より
 おくろ名之一代女六借屋は宿る女の衣敷と首
 ハ各列よ遠む合点既のどしりある女房中
 むと子細哉宿るよしはまも世間を悪ふ暗物
 女といひ宿る名哉まさへうるあし居物若し形
 分の雛妓も耻くしき急物ハ其内へおとまは

本邦ニ昔ヨリ彼脂粉
 錢ノ如キヲキカサレバ
 和名抄ニ提テウ乞盜
 類ニ収メタリノ後世モ
 許サレタル外ハコレヲ
 賣ララ得ズサルカケレ
 テ色ヲヒサクモノタエマ
 レテ地ゴト呼フ
 東鑑建久四年里見冠者
 義成と遊女別當トセラ
 ル一見エタル所役モカリ
 ナルニ京呼ニ太永八年横
 城司ノ券書ヲ傳タル者
 アリ其中ニ仍御公用品
 中ニ拾上實文宛於有
 其内ニ波合
 其内ニ波合
 何討テ改ム
 也と云

吉原町出来テ諸処遊女
 止メラレカ其後ホトテ又
 外ニコレ有シテ正徳享保
 ノ間ニ悉ク禁セラル後又
 次第ニ出来テ今ニ至レリ
 又ヤカテ禁止モアルヘシ
 バ久シカラス又コレアルヘシ

外此御合よゆらばおとを花代宿と云ふ
 乃々づ一月掛の男万金丹一角つよ定めく高産
 の男ハお対はくはくどくははあしきるまど
 うし又暗物といふハ恋の中宿よ呼出てうりそ
 先の勢を浪刃中にも然のこよ起よ衣類く法
 りし親を忌きく浪をあるおし位と付おぬとい
 たりあまると同く江戸よく地獄といひくもく
 う親義なり一代男よも暗物ろくを足くく月
 掛ハ月あこひなれとも一人よ何まよあしは伽
 羅女よ大板申此茶屋白人呂流掠屋云々有月久

深の衣紋は思き共幅帯のあはれ吹簪の糸の
 うかに伽羅の油よりくめく細緒の雪結延のそ
 れ紙をさせうけ身持ちるはあはく面の皮阿の
 うくく人中哉忍びにむく志申うさるる極よ地
 名を付ぬ物のよりうくくぬ哉蓮葉とのとりふ
 心之云く物類称呼も京大坂の旅人宿の下女
 とを以ハといふと阿りり一種のそのなや哉
 後ハあづくその名をりふあや○電をくくひ昔ハ
 江戸もも者ともえく一蝶うははる思あり海ほ
 そりう振袖是とる上よるはさぬ是より西橋

娘容氣三実ヲルハセ又心ナト上向カ下向カ蓮葉下ニイメラヲモツトメテ
 下ヤキ守ノ者男登ハラヒニシモ有ケリ
 吉永ツレノ童ニ舞子ノヲカノヤノ小節多クトリキ共ニ取ミタリセマニヒオホカノノアリ
 モアリトナリ

北里篇 都城ノ北里
 門ノ中別是ノ乾坤立街
 万燈夜徹昼不知長
 空雲霧昏南北
 家連對戸東西酒樓
 接開軒傾團傾城也
 世界尽善尽美觀
 自在管絃喧嘩瓊
 遊四孟盤浪藉珠
 薰内無貴無賤競

う大艦は電をくくひの祢子男りり此因哉心り
 ろる一代男にあくおのりろのうぬ祢やおる海
 の前よおろえくとすく志めの祢をなしくあ
 こくここ来きり下よハ核皮色の襟をうささる
 すさぬよ月日乃りけ哉うはちりやりけ帯む
 さいさげ淡化粧志く眉黛こく整ハおのづりく
 なでさけそ有さぬ中くは初穂のぶんふてハあ
 る母一云く品くそりハ遊女先ハ遊女のとせし

人倫初蒙承彙は丹波國は大京大明祢あり爰よ
 仕へ存る祢子むりハ勃をよ阿りきりりや
 今の太系こくを京のりく阿りりは元く人の
 是れ時分ハ阿りくとも者見京原の極こく

嬌奢一擲千金如土
塊神子仙乎省在人
八字步未收燒態
弱軀猶能重錦繡
滿頭却堪替瑤瑤
年上街上植梅花
爛熳句闌窄色已
衰香已殘一切拔去
無踪跡可歎嬋娟
誤此身暴風淫雨損
青春此時弃却誰
復顧九春芳菲
僅一句不知翠帳
紅圍裏我般般
歡笑與頓身雲泥
何論外沈事應
須有果又有因
林根青樓多少故
薄情恰對薄情
人

江東歌 此地亦是
葦烟霞過客一
葦到水涯就中
々街呈高妓時世
妝樣弄繁華
戲今放飲酒泉
湧拇戰爭勝肉
陣底朝三暮四情
不定東戶西門者
誰家門僚團圍

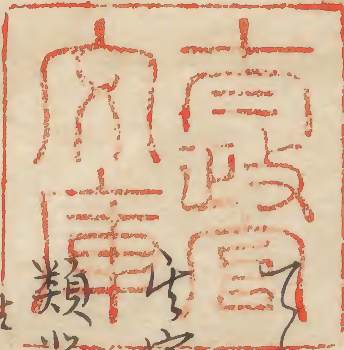
語心衷或歎笑
或歎嗟幾急有事
見交態思義亦自
如姊妹海誓山盟
竟何心昨是今非
空多悔尺素難絕
長江頭華表雀去
夕陽愁竹枝一曲欲
遣興朱欄清風醒
醉眸佳麗盛名一
瞬息此中意味君知
不總是間宵一場話
畢竟此生付浮沓
君不見深川無情水
悠悠長送去留舟
コハオレカラウタ作
ナラフコモノセシガソノ稿
セウニナヒテソノオボチ
オボツカナキハ句ノ落タ
ル処ナドモ有ベケレド
此條ノ吟ヒケサカイツ
ハントテ葦ウツチニマ
カセツルナリ

よハあやしきこと哉
りグこより出さるる女
画と出さるる白ゆり
たとうらねとらとど
衣なる。比丘尼舟一代
りり。越おろして云々
う揖とこる比丘尼又
貝耳りー海しき口ツ
ち。元船よ乗る法り云
なけ入るる或ハ割木
し。も言言はの意の少
よ。お察哉とのと勤め
か。くも海すし。色あ
と

の。今彼地の川口など
ハ。旅船よ賣る女あり
ん。船とらふりや。浮世
の。字りけり此況非之
ハ。ささうり堂りふ物
或。夜何系哉さをりら
の。何り誰と見むきま
あ。さる。哉あまハささ
り。未練のささうり賣
を。ぬし。ながうささ
処。よ。み。居。ま。は。さ
諸。見。青。樓。多。妓

薄情恰对薄情人

を名けしあゝん物類称呼は京大板よりそゝり
 江戸めく叔鷹記存より幻妻長崎めくをれをち
 四国めくけんさん間短大板及尾おめく人の妻
 哉りんさんとりふハ罵る例も用云こり厚く間
 短の字と當とるもいり風来も此字をりんと
音り
 んらんさい元可ぬるづ幻妻も正一とはいひ
 うう又其料一代女は上中下ぬりよ十文は極
 りしそのなれがよい祓がそ色くの新乃そんこ
又娘容気ニサウカノヲミテ健康ノ袖ヲヒカテ拾フ情ヲ實ニ下ラレバ貞享三年モ享保二年モ同シ價ニ其衾ヲミルニ黒キ布子ニ
見貞享三年の既よゝり此價之世よこれと古へ
白キ又エリヲサカレ振袖ヲキタリ是ホニ論ハナレバ今ニクラブレバラカレカラズヤ
 け君としひいと差はさるハ非あり甘藷奇職



人立君とある是なり音の間ハえりあまらる
 立君のお條ゆり此月記よりるはく君ハ
 厨子君なる哉辻と心えとるハ街は立その故之
 法一君ハ家よ形るとのこけ合よ妻とふ白か
 せ起り法一地ろくろ法一水とよめ起る家厨子
 不知の名之厨子とハ今俗戸棚とりふの類こ
 家之のさるゆり水色ハ名けし今の局之せの
 類之見之べり之今も糸原は厨子とよ不知の名
姓あり
 多りり

